

317
1310

584

集



始



特225
894



集

達
磨
堂
版



はしがき

この本は、私が過去數年間に亘り折にふれて書いて置いたものを一冊に纏めて見たいと云ふ他愛なき欲望を充したに過ぎません。内容は素よりがらくたばかりのことゝて、表題もわざと集の一字だけに致しました。この本を手にした方々が御自分でその上に何とか御書加へ下さるのも一興で御座いませう。私なら差詰がらくたをそのまま、我樂多と書くところですが、それは僭越、皆さん方に取つては集は苦の因でせうから、我樂苦他集と云ふ表題が適當かも知れません。

昭和三年十月

木戸忠太郎記

集 目 次

舊文明の終點としての太平洋……………一
ニュージーランドの自然其人……………三
湖上美人（マオリ戀物語）……………五
アラスカ氷河の美觀 附、視察船の遭難……………七
千山風景論……………一〇〇
大連星ヶ浦命名の由來と滿洲地名考……………一〇七
撫順炭田で捕れた數十萬年前の龜と其奇縁……………一六
鞍山鐵礦と京の大文字……………二五
赤化と自然及人生……………三三
黃白と自然及人生……………三五

人間の様な石炭、石炭の様な人間……………一六一

女性の山と男性の山……………一七四

展望車……………一八六

飯の食ひ方と国民性……………一九一

日給から月給になつた日……………二〇三

秋の蚊……………二二一

集 目次終

集

舊文明の終點としての太平洋

第二十世紀に於ける世界座の本舞臺が太平洋であることは當然の筋書である。それには色々な見方もあらうが、私は私一個の見地から之れを考察し、其順序として先づ太平洋の地理的要素を略述し、隨處最關係の密接なる大西洋と比較し、太平洋の現状に説き及ぼさうと思ふ。

太平洋は月世界が地球から取去られた跡の凹みだといふ學説があるが、餘り學者間には持て囃されなかつた。太平洋は地殻が固まつた頃から大體今の様な凹みであつたと云ふ學説の方が有力である。之れに反して大西洋や印度洋は往時と現

在とは餘程趣を異にし、形も大きさも幾度か變遷を経て現状に達したものだところである。

太平洋を始めて発見したのは無論東洋民族であらうが、それは唯日常見て居た丈で有意義に発見したとは云へない。歐洲人での最初の発見者はマルコボロであらう。彼は一二七五年東洋に來遊し、其紀行文を残した人であるから、太平洋の一部を實見したに相違ない。

アメリカの新大陸を発見したコロンブスは太平洋には達しなかつた。新大陸の西岸から始めて太平洋を見た人はスペイン人バルボアで、一五一三年のことである。越えて七年即ち一五二〇年ポルトガル人マゼランが始めて太平洋と命名した。

太平洋は一千百七十萬方里と云ふ廣大なる面積を占め、殆んど大西、印度兩洋を合せた程の大きさで、陸地の總面積より廣きこと約百十萬方里であるから、陸地の土石全體を以てしても、太平洋を埋め盡すことは出來ぬのである。其最廣い處

は赤道附近で、東西一萬哩に及び南北の長さ九千哩に達して居る。赤道に於ける地球の周圍の三分一以上である。

太平洋は北方ベリング海峽では狭まりて僅に三十六哩に過ぎず、亞細亞、亞米利加の二大洲は一葦帶水を以て隔てられて居るに過ぎないが、兩大陸の太平洋岸は南するに従ひ漸次左右に擴がり三角形をなし、赤道を南してからは縮まり氣味であるが、それでも太平洋の東西兩岸は非常な距離を以て隔てられて居る。大西洋は形は之れに反して略ぼS字形をなして屈曲して居る爲めに、東西兩岸の距離が三千哩から四千哩位迄の間にあつて、太平洋の様に擴がつて居る處はない。海上の交通は太平洋よりも大西洋に容易であることは、之れによつても直ぐ了解が出来るのである。

海の深さは太平洋にあつては平均四一〇〇米突で、大西洋の三八六〇米突に比べると二四〇米突深いのである。太平洋の特徴の一つは海溝の多いことである。

海溝と云ふのは大洋底に溝状をなして殊に深い處があるのを云ふので、フィリッピンの東方にある海溝は九七八八米突に達し、世界中の海で最深い處である。グアム島の東南にあるマリアナ海溝は之れに亞ぎ、日本群島の東方にあるタスカロラ海溝は八五一三米突に達して居る。

海流は太平洋も大西洋も大體に於て大差はない。太平洋で赤道海流の北折して黒潮となり、北太平洋を横ざりて米國の西北海岸地方の氣候を緩和して居るのは大西洋の赤道海流が灣流となり、歐洲北西部の海岸地方の寒氣を和らげて居ると同様であるが、其恩惠の分量は太平洋よりも大西洋に遙に多いのである。

二十日前後に於て、フィリッピン附近から日本群島を吹き荒らす暴風の多數はグアム島の南方北緯五度の邊から發生するのである。グアム島は太平洋島中唯一の米國領で之れと對峙する日本委任統治に係るヤツブ島との間に、前記の深い海溝が横はつて居たり、暴風の多數が發生したりすることは、別段科學的關係の

あることではないが、太平洋會議の開かれる世の中では興味多き話題であらう。

太平洋に島が多く大西洋に少い事も兩者の相違の一つである。さうして大西洋上の島が多くは不規則に並んで居るのに對して、太平洋の島は多くは弧狀の列をなして規則正しく排列されて居る。アジア大陸の縁邊にあるものは其適例で、大陸との間に邊海を湛へて居る。アリウシアン群島はベーリング海を抱き、千島列島はオホツク海を擁し、日本花彩島は日本海を包み、琉球群島は支那東海、フィリッピン諸島は南支那海、ニュージーランド南北二島は東濠洲海をいづれも其内灣に有し、亞濠二大陸の城廓として横はつて居る。其他ミクロネシア、布哇等悉く太平洋上に規則正しく散在して居る。ミクロネシアはマーシャル、カロリン、マリアナ、バラウの各群島より成り、獨逸領であつたのが、世界大戰後日本の委任統治の下に移つた。其中にマリアナ群島の南端にあるグアム島のみが、以前から米國領としても今日猶委任統治以外になつて居るのである。

このグアム島は陸海軍貯炭所及び太平洋海底電線の陸揚地としての要點で、米國西岸のサンチゴ軍港、布哇及びフィリッピンの陸海軍根據地と略ぼ一直線上に位し、軍事上米國にとりては重要な地點である。加之グアム島を有するマリアナ群島は南北の方向に羅列し、其北端は小笠原島に近づき伊豆七島を経て、飛石傳ひに直ちに東京灣に迫り得る點に於て、グアム島は米國に對する關係上日本に取つても警戒を要する地點である。米國から觀れば、斯かる要點が日本の委任統治の下にある群島間に孤立して居ることは、太平洋上に國威を發揚せしむる上に於て、頗る不安に感ぜらるゝのは當然のことである。グアム島と相對するヤップ島の問題が、日米間に容易に解決されなかつたのも全く之れが爲めである。太平洋島は火山島や珊瑚島計りで、其面積はいづれも小さく、産業上から云へば價值あるものに乏しいのであるが、太平洋上に國勢を張らうとするには主要なる根據地たるべき價值あることは争はれぬ事實である。水面上數尺に充たざるが如き低

い小珊瑚島にも、國運を賭してまでも争はねばならぬほどの價值がないとも限らぬ。

海岸線も兩洋大に其趣を異にして居る。大西洋では島が少い代りに、其海岸線は内海に富んで居る。従つて屈曲出入が多く、大陸の面積に比して海岸線長く、到る處に良港灣がある。太平洋岸は之れに反して海岸線の屈曲少なく良港灣に乏しい。亞細亞側は幾多の群島の爲めに、大陸との間に邊海を有すること前述の通りであるが、大西洋岸に比すれば屈曲出入少く、亞米利加側は一層單調である。アジア東縁の群島は今でこそ島であるが、日本、琉球、臺灣、フィリッピンなどは昔のアジア大陸の海岸線で、現今の海岸線は邊海が陷沒した結果として出來たもので、前者を一次的海岸線と云ふに對して、之れは二次的海岸線と呼ばれるのである。

アジア大陸の縁邊に平行して起つた階段的陷沒と共に山脈が構成された。アメ

リカ大陸の海岸に沿ふても同様の山岳が崛起したが、是等の山脈はいづれも海岸線と竝行に走つて居る。中央アメリカの一部にさうでない處がある丈で、他は悉く海岸線と大體其方向を同じくして居る。斯の如き海岸線を地理學上太平洋式と稱し、屈曲出入の少きも全く之れが爲めである。大西洋岸は之れに反して山脈が海岸線と竝行しないので、山脈は往々海で斷ち切られ居る様になつて居る。加之大西洋岸では高原狀地貌が直ちに海岸に迫ること多く、其等が屈曲多き海岸線の爲めに幾つかの高原塊に分割せられて居る場合が多い。斯くの如き海岸線を大西洋式と呼ばれて居る。それ故大西洋岸殊に歐洲側では、山脈は大抵東西に走つて居るので、海岸線は幾つかの國に分割領有されて統一は困難となる。スペインやポルトガルの様な弱い國でも、ピレニース山脈が東西に走り北方に對して城壁をなして居るので、獨立を維持して行けるのである。大西洋の米國側は東西走せる山脈が無いので、民族の統一困難ならず、早くも大共和國が獨立し得たのである。

る。

太平大西兩洋式に於てもう一つ異なる點は、山脈が太平洋岸では海岸に極めて接近して居るが、大西洋岸では遠く離れて居ることである。之れが爲めに大陸の太平洋側は傾斜面急で平地に乏しいのに反して、大西洋側は極めて緩漫なる傾斜面をなし、従つて大河は悉く大西洋に注ぎ、其廣濶なる流域は文化の移植を容易ならしめて居る。米國の大西洋岸には略ぼ之れと平行せるアパラキヤン山脈があるが、之れとても大陸の内部に對して弧狀をなして居ることが、太平洋岸の山脈と異なる點であり、且つ餘り高くないので、海岸から内地への交通を阻礙することが極めて少い。

火山が太平洋岸を取り巻いて數多く排列されて居るに反して、大西洋岸では殆んど火の氣が無いかと思はれる程少いことも兩洋式の相異の點である。火山の多いことは太平洋岸に沿ふて地殻に裂罅の多いことを證するもので、其必然の結

果として地震の多いことも亦太平洋式の特徴の一つである。斯くの如き地上の現象は其等の地方に居住する民族に大なる感化力を有するもので、國民性の相違には自然界が與つて大なる力があることを忘れてはならぬ。

次に鑛物産に就て兩洋式を比較すると、太平洋岸には新しく出來た岩石鑛床が多いが、大西洋岸には古いものが多い。前者が金、銀、銅、鉛、亞鉛等の金屬鑛物に富んで居るのに對して、大西洋岸には石炭、石油の如き非金屬鑛物多く、鐵だけは殆んど大西洋岸の專有物の觀があるが、それとても水成鑛床に屬するものである。大平洋岸にある水成鑛床としては石油がある丈である。それも米國側に多くアジア側には甚だ少い。

歐洲は勿論米國の大西洋岸が鐵と石炭に富んで居ることは過去に於ける物質的文明の大原動力となつて居る。米國にありては猶其上に現在及び將來に於ける最大原動力たるべき石油に富んで居る。米國が大に發展せんとしつゝある太平洋岸

にも豊富なカリフォルニア油田がある。唯米國の物足りなく思ふのは、太平洋岸には金、銀、銅、鉛、亞鉛、は多量に産出するが、鐵及び石炭の甚乏しいことである。二十世紀の今日に至つても、まだ米國の太平洋岸に一製鐵所だに設立されないのである。太平洋岸が如何に是等二大原素に貧弱であるか、解るであらう。石油が多量に産出して、他の二要素を缺いて居ては、太平洋岸に於ける物質的文明の基礎を確實にすることは出來ぬ。米國としては他に其缺點を補ふの道を講せねばならぬ。

然るに太平洋のアジア側はどうかと云ふに所謂一次的海岸に沿ふては、其面積も狭小である處から鑛産物は多量であるとは云へぬ。其中でも日本は比較的鑛物に富んだ國で新しい地質時代に出來た鑛床多く、金屬鑛物殊に銅の如きは面積の割合には多量に産出するものである。併し鐵鑛は極めて貧弱で、政府所有の製鐵所ですら、支那から其原料の大部分を仰いで居る有様である。石炭も比較

的多い方ではあるが、今後五十年も経過すれば無くなるだらうと云はれて居る位である。石油は石炭よりも一層貧弱で、外から輸入しなければ間に合はぬ程である。

二次的海岸線に屬する支那、西比利亞一帶の大陸沿岸にありては、鑛業は猶幼稚の域を脱せず、石炭と鐵とは進歩した設備のあるものが二三數へられるのであるが、全體として其産出額は日本にも劣る位である。從來の調査によれば、石炭の埋藏量は支那だけでも米國に亞ぐ程多いが、交通の不便や其他の關係から、其大部分はまだ開發されずに残つて居るのである。鐵鑛としても同様であり、其他の鑛産物も大抵は今猶未知數に屬し、國が廣いだけに其豊富なことが豫想されるのである。西比利亞の富源も亦鎚鑿を加ふべき餘地甚多く、寧ろ是からが發展の大舞臺と目されて居る。維新以後鑛業の異常に盛になつた日本に鑛産物の盡くる頃、大陸の大富源は果して誰れの手によつて開發されることであらうか。

以上述べ來つた太平、大西兩洋相違の點に立脚して、世界文化の變遷を考察するに當り、先づ人類發祥の源に溯つて見るに、世界の屋根と稱せらるゝパミール高原地方が人類最初の居所であると云はれて居る。人類は此高原から西と東に分れて移住し始めた。西に向つたものはペルシャ、アラビヤ、小亞細亞、埃及に古代文明の基礎を築き、希臘、羅馬の半島を経て其燦爛たる文化を普及せしめたが、東西に連互せる幾多の山脈が天然の境界となり、歐洲統一の大業は遂に一回も成功するに至らなかつた。けれど多數の國家は競争によつて各自獨得の文明を造り上げ、其處に一貫した西洋文明の源流が通つて居た。斯くしてパミール高原から西漸し、歐洲大陸に花を咲かせた文明は、英吉利を經、大西洋を横ぎつて米國に渡つた。大西洋は太平洋よりも幅が狭い。歐洲も米國も大西洋に向つて緩慢なる傾斜をなし兩岸共に良港灣に富み、西漸の文明は容易に大西洋に乗り出し、乗り出した文明は遲滞なく、米國の双手を擧げて歡迎受納する處となつた。大西洋は

物質的文明がまだ餘り發達して居なかつた其頃でさへ、文明の西漸に對して大なる障害とはならなかつたのである。

バミール高原から東に向つた人類は、先づ印度及び支那に文明の基礎を築き、印度文明は更に支那に入り、朝鮮を経て日本に東漸し東洋文明を大成した。日本の太平洋に於けるは英國の大西洋に於けると、其地理的關係略ぼ一致して居る。されど英國が西洋文明を容易に大西洋彼岸の米國に西漸せしめたに拘はらず、日本は東洋文明を其一次的海岸線外一步だも東漸せしむることに努力しなかつた。太平洋は大西洋よりも遙に廣い。太平洋に面して良港灣に乏しく、當然發達すべき海事思想の發達遅く、西方に向つてはアジアの東岸を辿つて多少發展しかゝつたことはあるが、八重の潮路を乗り越えて米國西岸に東洋文明を移植せんとするには、餘りに天然の障害が大に過ぎた。よし彼岸に傳へ得たにしても、東洋文明の東漸にはロッキーマン山脈が大なる障壁となつたことであらう。

東洋文明は日本に至りて大成したが、同時に行詰まりとなつた。歐洲の文明が西漸すると同時に東漸して、熱帶地方の太平洋諸島に及び、日本が鎖國主義を採つて籠城して居る間に、盛に白人の國旗を無人島や蕃人島の椰子吹く風に翻さしめた。東洋文明は何故に斯くも保守退嬰主義となり、西洋文明は進歩開發主義となつたのであらうか、按ずるに西洋文明は屈曲出入多き海岸線上に大成したが爲め、夙に海事思想を發達せしめたが、東洋文明は印度及び支那の大陸内地に發育し其海岸線亦單調にて對外關係少く、漸次保守主義に陥り、日本に傳はつてからは、其島國民性が一層累をなしたのである。之れを約言すれば、西洋文明は海成であり、東洋文明は陸成であるとも云へるのである。斯かる文明の特性も畢竟大西太平洋の地理的相違に基因するのである。

米國に西漸した歐洲の文明は大西洋に向つて緩斜せる地勢上容易に普及繁殖するに至つた。歐洲列強が地形上各自に造り上げた幾多の文明の形質を打つて一九

とし、之れを融合併呑して米國特有の新文明を大成した。併し其西漸の勢頗る猛烈なる西洋文明も、ロッキーマン脈の天險に遮られて容易に太平洋岸に進出することが出来なかつた。併しそれも一時で、一八五〇年カリフォルニア州に豊富なる砂金層の発見せらるゝや、さしもの天險も忽ち探險家の蹂躪する處となり、太平洋岸は須臾にして黄金の巷と化し、一八六六年米國東西縦貫鐵道完成せらるゝに及び、西漸の文化は堤を壊つた洪水の如く、太平洋岸へと押し寄せた。之れが導火線となり、オレゴン、ワシントン兩州の大森林に斧の響賑はしく、カリフォルニア州の大平原は沃野千里と開墾さるゝに至つた。斯くて翌一八六七年アラスカを露國より買収し、ベーリング海峡を隔てゝアジア大陸に接壤し、一八九六年有名なるクロンダイク砂金層発見せられ、極北の地も一朝にして拜金宗の本山と化した。米國の太平洋岸は是に至つて俄に重要視せられ、文明西漸の大理想の下に新大陸の文化は太平洋に乗り出すことゝなつたが、太平洋は大西洋よりも幅が廣

く、其東岸には鎖國主義の日本群島が東洋文明の城壁に立籠つて、容易に其門戸を解放しなかつたのである。

是れより先、西洋文明は其西漸の遅々たる間に、早くも東漸の途を開き、其海路は太平洋を横断するよりも遠くに拘はらず、沿岸傳ひに來り得る便宜あるが爲め左までの困難なしに西洋文明を東漸せしむることを得て、一五五〇年（足利義晴時代）にはポルトガルの商船始めて平戸の港に來朝することゝなり、一五六四年には英國も亦織田信長に通商を乞ふに至り、歐洲の西洋文明は早くも日本の西部に輝き始めたが、當時の鎖國主義は容易に新文明を受け入れることが出来なかつた。徳川氏の末葉に至り、東漸の西洋文明に遅るゝこと三百年、嘉永六年（一八五三年）に至りて漸くペルリの來朝と共に、新大陸經由の文明が西漸することゝなつた。斯くて西洋の文明は一は東漸し一は西漸し全く相反する方向に進みつゝ地球の球體であることを證明して、端なくも日本帝國——一次的太平洋岸に落

合つた時、茲に東洋文明の覺醒となり、維新の大業が成就したのである。

王政復古以後の日本は眞に旭日昇天の勢を以て國運を振興し、日清日露兩戰役を經、世界大戰にも參加して、一躍世界大國の班に列することを得た。其勢力範圍は東洋南洋に擴がり、殊に南洋諸島に委任統治の局に當ることとなりて、太平洋上最重要なる國の一つとなつた。最近五十有餘年に於ける日本歴史は、東西古今を通じて最誇りとなすに足るべき一大光明史である。昇る日の國、其赫々たる御光には、世界の隅から隅まで、驚異の眼を眩からしめたのである。併し日光隠れて雨來り、雨霽れて日光現はるゝが、天界當然の現象であるが如く、人間界にも永久の平和を望むことは出來ぬ。世界中最深き海の上より、今にも震天動地の暴風が捲き來らんとする時、豫報は雨か、晴か、太平洋上氣壓の狂變には、國民舉つて刻々の注意を拂はねばならぬのである。

東洋の文明は支那、印度、朝鮮の文明を統一した日本に大成し、西洋の文明は英佛獨其他の特種の文明を併合して米國に成熟した。東洋文明が太平洋岸に停滯して居る間に、西洋文明は東漸西漸して之れに併合せんとした。併呑か融合か、其孰れにしても東西文明の接觸點は太平洋であらねばならぬ。この二種の文明は如何様に接觸するであらうか。衝突か和睦か。二途其一に出ねばならぬ、其融合は世界人類の幸福進化の新道程となるべく、其孰れか一方に併合せらるゝことは、文明の偏重退化の急坂となるであらう。衝突は是非避けねばならぬと同時に、座して併呑を待つことも亦東洋文明の恥辱であり、世界人類全體の禍源となることを忘れてはならぬ。

天然物保存の必要を唱へ出して米國大統領ルーズベルト氏は一九〇三年五月十三日桑港に於て、太平洋問題に就て一場の演説を試みた、其筆記に曰く、

二十世紀に於ける商權擴張の最大舞臺は太平洋にあり、濠洲の勃興日本の發達を始めとして、アジアの東海岸に於ける歐洲各國民の移植は之れが證據た

り、而して清國は不幸にも國防の備なく、而かも天産物に富める國民として存立せんとするの極めて愚なる所以のオブジェクト・レツソンを吾人に與へたり。……我大共和國は太平洋面に擴張したり、今はカリフォルニア、オレゴン、ワシントン、アラスカ、布哇、フィリッピンに於て、正に太平洋の一等國たらざるべからざる海岸線を有するに至れり。……太平洋に於ける米國の地理的位置は十分の注意を以て此位置の便宜を握らんか、將來該洋上に於ける平和的權勢を保證し得べし。……吾人が今現に沈設しつゝある海底電線も近く完成すべく、開鑿せんとする運河は大西太平洋兩洋を連結するものにして吾人の商業並に陸海軍勢力を著しく増進するものなり。若し吾人にして自ら其弱きを示すにあらざれば、吾人は吾人の開始したる事業を遂行せかざるべらず、云々。

其海底電線は一九〇六年に完成し、パナマ運河は一九一四年に開通した。米國

の商業並に陸海軍勢力は著しく増進した。さうして清國は中華民國と改名した今日も猶不幸にして國防の備なく、唯以夷制夷の外交策を弄するのみで、しかも天産物に富める國民として存在せんとするの極めて愚なる所以のオブジェクト・レツソンを依然として、世界各國民に示して居る。嘗て國防の必要なる所以を説いた米國は、今や世界平和の名の下に軍備縮小論を唱へ出した。若し軍備縮小が世界平等に行はるゝならば、それは世界人道の爲めに結構なことであらう。併し彼の所謂オブジェクト・レツソンは矢張、何時までもオブジェクト・レツソンである。有り餘る天然物を擁しながら、猶且つ其不足を訴へ其保存を力説する國民の前に、天然物豊富にしてしかも國防なき國家がどうして平穩に獨立して行けるであらうか。堂々たる太平洋會議の背後に、天然物分取の目的が潜んで居はしなかつたであらうか。太平洋は終に大不平等となりはしないであらうか。

東洋文明は既に行詰まり、西洋文明も亦行詰まらんとして居る。舊文明の終點

が太平洋に劃せらるゝ時、新文明は又應さに太平洋から出發すべきである。新文明は東西文明の融合によりてのみ、達成せらるべきものである。其孰れかに併呑征服せらるゝ時は、世界の文明はやがて行詰まり、退歩すべき運命に逢着せねばならぬ。物質慾にのみあこがれて、この大理想を滅却する國家があらば、それは實に人類進化の大敵と謂はねばならぬ。この意味に於て、太平洋は第二十世紀に於ける世界座の本舞臺である。

ニュージーランドの自然と人

一、日本を半分にした様な國

ニュージーランドは南太平洋上、南緯三十四度と四十八度の間、東經百六十六度と百十九度の間に位する島國である。英國の領地で英國人が南洋の英國と呼んで居るのには何等の不思議はないが、位置地形及び其他の地理學的事項から云へば寧ろ吾日本島國に類似した點の多いことを見出すであらう。

經度から云へば日本よりも少しく東方に偏して居るが、緯度の上では南北の差こそあれ殆んど同一の位置を占め、吾等が北極星を見る眼を南に轉すれば、正しく地平線上同高の天空に南極星を見出し得るのである。地形及び面積を比較すれば、ニュージーランドは南北二島より成り、日本を半分にした様な國である。其

總面積二十七萬一千方呎は日本の四十四萬九千六百八十九方呎(朝鮮を除く)の二分の一強に當り、北島は十一萬六千五百方呎で、北海道と九州を合せたより稍大きく、南島の十五萬四千五百方呎は本州島の三分の二強である。其北島の形が北海道に似たところがあり、南島が本州島を富士火山脈の線で横斷した其北の半分に類して居るのも偶然ではあるが面白い一致を示して居る。東北より西南に向つて細長く濠洲の東海岸と並行して居ることも亦日本群島が同方向にアジア大陸の防波堤の如く羅列して居ると好一對である。唯後者が大陸との間隔僅に半日の航程に過ぎないのに、前者は濠洲を距ること千二百餘哩の遠きに達して居るの相違はあるにしても、之れを日本を半分にした様な國と見ることは餘り懸離れた比較ではあるまい。大阪朝日新聞記者土屋元作氏は嘗て此の島國を形容して、恰も伊太利を逆さにして中部羅馬の邊に運河を開鑿せるが如しと云はれたことがある。これも面白い見方で、面積も殆んど同じだが、其他の點では日本と對照した

方が一層適切であると思ふ。

氣候も亦日本と似て居る。北島の北岸にあるオークランド港の一月(南半球の酷暑)平均華氏六十六度六、北島の南岸なる首府ウエリントンでは六十二度六、南島の南端に近き都會ダニーデンの七月(大寒)平均四十二度を下らず、オークランドの年平均五十九度五は長崎のそれと相同じく、ダニーデンの五十二度は石巻と略ぼ等温である。大體に於て中部日本の氣候に近く、しかもその極暑嚴寒からは全く免れた温帶國としては日本人をも羨ましがらすに充分である。雨量は三十吋乃至百吋で北島の大部分は五十吋乃至七十吋、南島は二十吋乃至四十吋の間にある。日本では澎湖島の二十六吋、敦賀の百三十二吋を其最少及最多量とし、東京の六十二吋を中位量とすれば、雨量にも亦兩島國の一致點を見出し得るのである。ニュージーランドが水に於てばかりでなく、火に於ても日本と同じく火山國であることは項を別にして記載するであらう。

二、原住民族對英人

ニュージーランドの原住民族はマオリと呼び、ポリネシア種族に屬す。その土語では、此國の名をアオ・テア・ロアと云ひ、長白州の義である。此島國が始めて白人に知られたのは西紀千六百四十二年のことで、和蘭の西南部ジールランドより來航したタスマン提督が発見當時ステーション島と命名したのを、後ニュージーランドと改め、英國が占領してからも其儘襲用して居たのである。

マオリ種族が大平洋上から此島に移住したのは多分第十三四紀の頃であらう。彼等は北島をテ・イカ・ア・マウイ（マウイの魚）と呼びて、マウイ神が海中より釣り上げたものと信じ、南島は、其西岸で発見された緑石（マオリ語ではポウナムと云ひ、硬玉の一種）を石斧や裝飾品として愛用するところから、之れをテ・ワイ・ポウナム（緑石の島）と呼ぶ。彼等が熱帯群島の椰子の葉蔭から、獨木船カウに揺

られ、始めて風光明媚な温帯島に到着した時には、前途の光明を夢みつゝ、左に掲ぐる新郷土の歌を聲高々と合唱し、足取面白く踊り興じたことであらう。

われは來りぬ。その足元には新しき陸横はり、

頭上には、新しき空擴がる。

われは立ちぬ。この新しき國に、

わが故郷の如く、

地球の靈よ、旅人はその心を汝に捧ぐ。

然しこの新海國も、彼等には長く輝けるアオ・テア・ロアたることを得なかつた。紀元千七百六十九年、英人クック提督が三百七十噸の小帆船を操縦して其沿岸を測量して以來、捕鯨船の來航は漸く頻繁となり、其儘土着となつた者もあつたが、千八百二十五年ハード提督が始めて永久植民を企て、より、基督教傳道の功亦空しからず、千八百三十九年ニュージーランド會社組織せられ、其翌年一月

二十九日ワイタングイ條約が土人との間に締結せらるゝに及んで、完全に英國の領土となり終つたのである。

斯くて先住民族は數百年間を夢の裡に、美なる環境の恩澤にも恵まれず、曾て文化の片影をだに創造することなくして、空しく白人種の治下に屈服するに至つた。彼等の中には遂に先住者としての權利を主張する熱血男兒が一人も居なかつたのであらうか。彼等は遠來の移民をして何の苦もなく我物顔に振舞はせたであらうか。其豊富なる天然資源を彼等に委ねて徒らに指を啣へてのみ居たであらうか。或者は巧妙なる基督教の傳道に歸依して神の祭壇に跪いた。或者は一として奇ならざるはなき舶來の文物に眩惑されて不利益な物々交換にも甘んじた。然し斯の如きは素より彼等の凡てにはなかつた。其事々に感激し易い素質、敵を食ふを以て勇者とする残忍性、慄悍にして争鬪を好む頑強な肉體の持主は屢々英人に反抗して、慘酷なる血戦を繰返した。加ふるに當時此絶海の孤島に移住し來る程

の白人の事とて、皮膚の色こそ白けれ、故國を追はれた無頼漢多く、利慾の前には眼のない蠻性は多くマオリに譲らず、衝突の絶えざるは寧ろ當然過ぎる位であつた。植民政府も亦先住民族を歸順せしむる困難さを是等の同胞に對する處置にも均しく感ずるのであつたが、千八百七十二年春最後まで頑強に抵抗したテ・ク・イ・テイ一團の滅亡を以て、新領土平定劇の幕は閉ぢられ、今は唯各地に残れるマオリ特有の保壘の跡が旅客に當年の筋書を物語るのみである。

英人が始めて此國に來航した頃には、マオリの人口は概算十萬人を下らなかつたが、多年繼續された戦鬪の結果と、新來文化の影響を受けて、生活上習慣の急變を來し却つて健康を害し、従つて死亡率を増加したこと爲めに、人口著しく減少して、千八百七十四年には四萬五千人を算するに過ぎなかつた。爾來少しづつ増加の傾向を生じ、千九百十一年には四萬九千人、千九百二十一年には五萬二千人、千九百二十四年には五萬四千人以上に達し、明かに再興の兆あるを示し

た。由來低き野蠻の状態から高い文明の境地に躍進せんとするには、どうしても一度は其傳來の習慣を打破して生活の調和を失ふ結果を生ずる。此急激なる變化の極點にも堪へることの出来る民族ならば、決して絶滅する憂はないのである。之れをマオリ族に徴するに、彼等も亦絶滅する様な劣等蠻民ではなかつた。彼等は向上すべき素質を有つて居ながら、今日までそれを發現せしむるに足る程の刺激を受けなかつたのである。今では僅ながらも年々いくらかの増加を示して居る。それは彼等が歐風の生活に順應し得る様に進化して來た證據である。今後どれ程まで發達して白人の勢力範圍を蠶食する様になるかは豫測出来ないが、何時かは其繁殖を阻止する必要を感ぜらるゝ日の來らんことを想像するに難くないのである。

政府が特にマオリの爲めに建てた小學校の數は百を越え、私立にも加^{カトリック}特力教徒の開いたものが中々優勢であり、學童の總數一萬に達し、順を追ふて大學に進み

得る途も開かれ、已に卒業して醫者法律家代議士などになつて居るものもあり、四人までは下院に一人は上院に代表者として列席することを得、彼等の頭腦が高等の智識を收むるに適して居ることは最早争はれない事實である。マオリの子供等は他の未開人種によく見る様に頭から自分を卑下して何時も一目を置くこと云ふことなく、子供としては殆んど對等の交際振を發揮して居るのである。彼等が成人後も猶能く其氣分を以て白人の間に伍し得るであらうか。唯其英語を善くし社交に慣るゝを以て、吾亦開化せりと自負するに止まらないことを念するのである。

三、マオリの民族性と其風俗

マオリの家は木造又は茅屋である。森林に富み材木には少しも不自由なき國ゆゑ、土石の類は殆んど建築に用ひられる場合がない。屋根は葦の類で葺き、赤黒く塗つた板壁や柱には色々な彫刻が施されてある。渦卷模様が最多い。室内には

何時も薄暗くじめ／＼した土間に麻蔭を敷き其上に起臥して居る。衣服の上等品は亞麻で織つたものであるが、平常着はフォルミウムと云ふ草の纖維を原料としたものである。裝飾的には美しい鳥の羽毛を織り込む。羽毛ばかりで衣物に仕立てたものもある。短衣は肩を蔽ふに止まり、其上に簍の様な腰衣を纏ふ。大袍を裾長に着なすときも右肩は蔽はない。髪は男は短く刈り、女は二つに分けて胸の上に垂らして居る。足は跣の儘であるが、近來は靴を用ふるものが多くなつた。食物は自然の儘のものに其大部分の供給を仰ぐ。魚類は干物にして食用に供するが、好物と見え、厨も食卓も魚類を絶つことがない。朝夕二回同性又は同階級のもの戸外に團欒して食事を取る。賄方は女の任務に屬し、料理した食物は亞麻で編んだ籠に入れて膳に上す。一度用ゐた籠は決して二度使はない。潔癖はマオリの特性の一つである。

男は悉く戸外の勞役に従事し、武術で鍛へられた筋骨逞しく、横死するに非さ

れば必ず天壽を保つ。彼等が最不幸と思ふことは病氣になつた時と敵に壓迫せらるゝ時とである。老人と女とは常に屋内にありて生業に従事する。女は家事一切を取扱ひ老人は籠を編んだり網を綯つたり、石を磨つて刃物や其他種々の器具を作つたり、或は終日根氣よく彫刻に耽つたりして居る。特に木彫の巧妙なることは野蠻人中彼等の右に出づるものはあるまい。祖先を表象したブーブーと呼ばれる彫刻物は人體の畸形を刻んだもので、到る處に裝飾として用ひらる。此國の名産の一なる翡翠玉(綠石)にも此形を彫刻したが多い。それをマオリの女達は胸の飾にして居る。

渦卷は最廣く彫刻に應用せらるゝ圖案の一つであるが、彼等の顔面に施せる刺青にも此形をしたのが多く、額に寄る皺を誇張愛翫するかの如くに思はれる。日本の歌舞伎十八番などに登場する勇者の顔を彩る紅隈の様なものもある。女の口の縁には樂器の形などを細い線であつさりど入れる。彼等の鼻の概して扁平なこと

は其顔の美觀を損するのであるが、これは赤子の時に母體に壓しつけられた結果である。彼等の敬禮の表はし方は手を握ると同時に鼻と鼻とを觸れ合はせるのである。この甚面白い習慣には、鼻が平たくては距離が遠くなつて勝手が悪いであらう。

夜になると、一家團欒して昔話や系圖などを語り合ふ。未開人種で彼等ほど古き傳説を固執し、古き歌謠を保育して居るものはあるまい。大抵の白人は家の系圖と云ふことには冷淡で、漸く其五六代前位迄しか溯れないが、マオリは少くも二十四五代前迄の系圖を暗んじて居る。ポリネシアから獨木舟カノエに乗つて此國へ渡來した頃迄の家の歴史は傳説的にもせよ、容易に彼等の倒叙し得るところである。彼等は其系圖を貴ぶ結果郷土に對する執着心は非常に強烈である。森も小川も野も山も、住み慣るれば其處が直ちに彼等の生命の源泉となるのである。此感情はやがて彼等の詩歌に織り込まれ、常に熱烈なる情火を燃え立たせて居るので

ある。彼等が其詩的なるホイ踊、勇敢なるハカ踊に、夜の更くるのも忘れる迄に興ずるとき、ポリネシアの珊瑚礁上、椰子の實の累々たる木の間の月影に、彼等の祖先が本能的に浮れ遊んだ太古の情趣が夢の様に彼等の眼前に髣髴するであらう。

マオリの階級制度は自由の民と奴隸に分れ、戦争で捕虜になつたものは皆奴隸として使役される。其制度は規律正しく、劃然たる上下の區別は全く優勝劣敗の結果である。財産は私有又は共有であるが、若し其所有主が自衛力に乏しく財産を保有することが出来ないとき、彼よりも上級のものが欲求したときに之を拒む權利がなくするのである。然しさうした專制的階級制度も、彼等が歐化するに従つて次第に緩和さるゝに至つた。

四、築山の様な火山の群

マオリの民族性に環境の影響があつたことすれば、日本と同様に火山に富んで居ることは確に其一因と見做さるゝであらう。其分布の有様を見るに、南島に甚少く北島に多い。マオリの人口も亦北島に其九十六%を算し、南島は僅に其四%を容るゝに過ぎないゆゑ、彼等の性格に影響した環境は主として北島のそれであらねばならぬ。天空を劈かんとする火山の雄姿、其地軸を動かさんとする爆發の偉力は彼等の心膽を寒からしめたと共に、數百年間に互りて、感じ易く激し易き熱烈火の如き性情を彼等の心頭に鬱勃たらしめたであらう。其腦力に於てマオリがアイヌより一步を擡んづる如く、北海道に似た北島は其火山性に於て一段の優勢を示しつゝ、其門戸を太平洋上に開いてゐるのである。

旅客のニュージールランドを音訪れんとするものゝ大半は北島の要港オークランドに向ふであらう。船は島國の北端を廻つて其東海岸に沿ふて南下し、ハウラキ灣に入れば、左舷近く椀の蓋を伏せた様なランヂトト火山島が早くも遠來の珍客

を港外に歓迎して居るのである。此山の名はマオリ語の血の空と云ふ義で、昔噴火の際天が焼けて血の様になつたところから此名を得たのである。傳説によれば此火山は灣の西岸近く底なき海と呼はるゝタカプナ湖から投げ上げられて出來たもので、其跡が湖水になつたと云ふ。琵琶湖が一夜に掘れて富士山が出來たと云はるゝ日本の傳説と其着想を一にして居るのは面白い。さうして前者の方が一層學理的であるのは、タカプナ湖が低い火山の火口湖に外ならぬからで、富士山對琵琶湖に比すれば、距離も緣故も著しく接近して居るのである。

オークランド港を含むワイテマタ灣なる名稱も亦マオリ語の輝ける水、直譯すればマタツフナ即ち黒曜石に類する水と云ふ義に當り、マオリの祖先が其靜かな灣上を眺めたとき、黒曜石の劈開面の様に輝いて居たので、斯く名づけたと云ふ傳説である。此形容はマオリが火山岩に關して若干の智識を有することを物語つて居る様にも思はれる。其眺望に最適當なアルバート公園は海岸の小高い丘にあ

りて、其周圍には官衙や銀行會社旅館などの大建物が並んで居るが、此丘も亦一個の獨立した火山である。幸にして其活動力は全く死滅して居るから、忽ち焦熱地獄と化するが如き慘劇の演ぜらるゝ心配は先づないとして、噴火山上の舞踏は絶えず行はれて居るさうである。

オークランド市及び其近郊には、この公園火山の外に築山の様な小火山が幾つも散在して居る。市街を南に出外れた處にエデン山が聳えて居る。此地方での最高峯であるが、それすら海拔僅に六百四十七尺に過ぎない。火山灰層を被ふた山腹の熔岩の上には瀟洒な住宅が並んで居る。エデンの様な花園が地獄の上に平和な家庭を幾つも彩つて居るのであらう。此火山の直ぐ東隣にセント・ジョン火山(三百九十六尺)ホブソン火山(四百三十尺)、少しく離れてマウングレイ火山(三百五十三尺)あり。西方には三哩程離れてアルバート火山(四百尺)、西南にはスリーキング火山(三百九十三尺)南方には一哩内外の處にワンツリー火山(五百八十四

尺)、其南側にスマート火山(二百九十七尺)あり。猶南の方五六哩隔れるマヌカウ灣の東岸には、マンゲレ、ブケツツ、ブケイチ、オツアタウア、タケタケ、マヌレワマタカルア、オタラ等の火山ありて、いづれも高さ三百尺以内の小丘である。面積僅に二十方哩に過ぎない小區域内に斯く多數の火山が密集して居ることは、地球上他のいづれの地方にも見られぬ現象である。

右の内、ワンツリー火山は市の南郊にあるコルンウォール公園の築山になつて居る。一名マウングキーキー山とも云ふ。山腹には昔マオリの築いた城壘の跡が階段状に残つて居る。マウング・キーキーとは城壁の山と云ふ義である。其處から三哩ほど西行すると北島の西岸オネハンガ港に到る。オークランドの海岸から此港まで僅に七哩の地頸をなして居るのである。港の西端に近く直径二町計りの圓形の船溜りがあつて、電車は其周圍の土手の上を走る。此船溜りは人工でわざ／＼掘つたものゝ様に見えるが、何ぞ料らん、是れ亦噴火口の跡で、其一部が海

に開いて入江をなして居るのである。此火山口港はホプアと呼ばれ、灰のみで盛り上つた極めて低い火山で、電車が走つて居る土手は其外輪山頂である。大抵ならば遠くの昔波に攫はれて居るべきのが、海拔十五尺の火山として兎も角も其形を保ち、其上に文化的施設を載せて居ることはどうしても自然の悪戯としか思はれない。斯の如き小火山口港は此外にマウガレイ火山の麓の一つ、オークランド港の對岸に二つある。

是等の火山口港は地理學の教材として校庭へも移し得る好標本であるが、其規模の大なるものは南島クライストチャーチ市に近きリッツェルトン港である。東西北の三面は急傾斜の外輪山を以て圍まれ、南方のみ外海に通じて居る。火山口港たることは云ふまでもなく、隧道はその外輪山の横腹を貫通し、汽車之を過ぐるに四分十秒を要す。幸にして死火山のことゝて痛いとも何とも云はず、旅客は安全である。

五、温泉と地獄谷

火山作用の現に活動中のものは有名なロートルア温泉地方に於て見ることが出来る。此温泉はブレンテイ灣の南方、オークランド港から鐵路百七十一哩の地點にある。此地は海拔一千尺の高地に在りてロートルア湖に臨み、周圍は火山岩より成れる屏風で取巻かれて居る。ロートルアが温泉地として世界的であることに就ては原因は幾つもあらうが、氣候がよいのと、温泉湧出量の豊富であるのと、殆んど同じ場所から性質の全く異つた數種の温泉が出るのとは其主なるものである。殊に最後の事項は他地方に類例の少いことで、ロートルアが温泉地として其聲明を轟かせたのは全く此特徴を具へて居るが爲めである。

浴客が此地に充滿する季節は一二月の候である。それは避寒の爲めではなく、避暑を兼ねての入湯客である。北半球からも其頃來浴するものが少くない。若し

世界の交通が緯度上に於けるが如く經度上にも便利になつたら、この南半球の日本とも云ふべき火山國の温泉へ、夏は冬を、冬は夏を求めに、北半球の日本からも出掛けることがあながち贅澤の沙汰とは云へなくなるであらう。林檎、バナナ、チースなどが歐洲の夏へと輸出せらるゝ如く、マオリの富豪達がニュージールランドに似た北半球の火山國へ避暑避寒を兼ねての見物に來遊することも決して不可能とは云へなくなるであらう。

ロートルア地方より湧出する温泉の量は實に莫大なもので、其豊富なる點に於て日本の誇とする別府温泉も到底其敵ではない。此地方の雨は夕立の様に烈しく降ることが多いが、いくら降り續いても道路のぬかるむことがない。それは此附近一帶の地質が輕石層から出來て居るためで、地表に落ちた雨滴は直ちに滲透して地下水になつて仕舞ふからであるが、此輕石層の存在が温泉の性質に大關係を有つて居ると同時に、過去に於て如何に、大活劇の演せられたかを物語つて居る

のである。

温泉は湧出する計りでなく噴出する量も亦頗る多い。それは間歇泉としてゝある。官立温泉場の前の小池内に小規模人工的のものが絶えず湯霧を庭の木立に送つて居る。其規模の大なるものはロートルアを距ること二哩なるワカレワレワに群集して居る。東西七八町南北三四町の面積は温泉の沈澱物で眞白に輝き、其間を幾條ともなく瑠璃色をした暖かい流れが滾々として盡きざる地球内部の消息を齎らしつゝ、ブアレンガ河へ注いで居る。其處にはワイロア、ワイキテ、ポフツテホロ、プリンス・オブ・ウエールス・フェザーなどの間歇泉が各其沈澱物によりて高められた噴泉塔を擁して相對峙して居る。ワイロアとワイキテとは其盛時に於ては三百尺の高さまでも熱湯を噴き出したものであるが、今では全く休止の状態に歸し、ポフツのみ猶其活動を續け、一定の時間を隔てゝ間歇的に高さ百尺以上の湯柱を立てゝ居る。是等の外、トルベド、ポーリツヂ、バレコフル、コロ

チオチオ、テヒナウなど、稱へらるゝ温泉池又は熱洞が散在し、いづれも沸々たる音をたて、熱泥を盛り上げてゐる。テヒナウの洞では、嘗て敗軍の會長テツクツクなる者が捕へられて、其腦漿を煮て食はれたと云ひ傳へられて居る。

是等のいづれも皆日本にあらば何々地獄と名付けらるべきものであるが、このワカレワレワ大地獄に幾十倍せる火山力大活動の餘勢がタラウエラ火山を盟主とせる大地裂線に沿ふて、今も猶當年の大慘劇を物語つて居るのである。此稀有の大爆發は千八百八十六年六月十一日午前一時頃大音響大地震に伴はれて、タラウエラ火山の北端に始まり、南々西の方向に海拔三千六百尺の山塊を眞つ二つに裂き、黒煙濛々として天に冲すること實に一萬五千尺の高さに達し、天斧の尖端は猶も南西に進んで大地を地球の中心までも斷ち切らんする勢ひ、其衝にあたれるロトマハナ湖は、數分前までは紺碧を湛えた昔ながらの瀦水を、擧げて奈落の底に委ねたと見る間もなく悉く水蒸氣と化し、嘗て紅の臺ピシクテレーヌの美名を馳せた硅華の天

工をも一團の塵埃と奪ひ去り、更に南西方オカカの湖畔までも地獄との通路を開き、漸く其鋒銛を收めたが、裂罅の延長實に九哩、深さ三百尺乃至九百尺、僅々數時間を出でずして穿ち去り、黒煙白霧相混闘して天地晦冥、雷電相衝激して乾坤爲めに覆るかど計り、眞に凄絶慘絶の極みであつた。

この未曾有の大活動は數日の後漸く衰へ、爾來鎮靜に歸するに従ひてロトマハナは以前よりも廣き湖となり、紅の臺ピシクテレーヌのありし跡は熱湯を湛へたる深淵に臨んで白煙濛々たる絶壁となり、地軸との通路は次第に塞がれて、エコー火口、フライングバン、ブローホール、インフェルノ火口などの小地獄を残すのみとなつたが見渡す限り火山灰を以て蔽はれた荒寥たる有様は如何に其有史以來の大慘劇であつたかを物語るのである。併しそれも一時的平穩に過ぎなかつた。千九百年二月に至りて、俄然裂隙の中央部に抱ける一小火口より熱湯を噴出し、黒泥を奔騰せしむること數百尺、一大間歇泉を現出しワイマングと名づけられた。千九百三

年には其威力頂點に達し、噴湯天に冲すること一千五百尺に及び、世界第一の大間歇泉と稱せらるゝに至つたが、其後一時平靜に歸し、千九百十五年其活動を再興し、現今は不時の噴湯を見るも到底昔日の面影を留めざる迄に衰微した。然しそれとても見掛けの無事に過ぎないかも知れぬ。あの眞ツ二つに劈かれたタラウエラも千八百八十六年六月十四日夜までは全く死火山として冷たき月光を浴びて居たではないか。

若し當年の大活劇の跡を精叙しやうとすれば、數百頁の筋書も猶足らぬであらう。故に今は一先づ此裂罅に別れを告げ、其終點なるオカロ湖より島國第一の大湖タウボに向はんか、略ぼ其延長線上に於て更に數多の間歇泉噴汽孔など、火山力活動の今猶衰へざるを見出すであらう。嘗に其等の小規模のもの計りではない。タウボ湖それ自身すら一大火口湖なりと云はれ、トンガリロ、ナウルホエ、ルアペフなどの活火山いづれも海拔六千尺乃至九千尺の絶巔を連ねて、覇を天國

に稱へんとして居る。其西方には白扇倒に懸るが如きエグモント火山、一名タラナキ山と呼ばれ、八千二百六十尺の高距を擁して其崇高なる雄姿を南太平洋に轟して居る。ヘンリー・ランドル氏は其麗容を激賞して日本の富士山も及ばず、唯之れに匹敵すべきはフィリッピン群島のメーヨン火山あるのみと、お國自慢を發揮して居る。宛然たるニュージーランド富士、本物と肩を並ぶれば低きこと四千尺それでも甘んじてランドル氏の讃辭を受けるのであらうか。

六、氷河の深峽 フィヨルド

北島を火の島とすれば南島は氷の島と見るも可なり。北半球と反對に、北窓は日光を受けて陽氣に南窓は寒風に襲はれて陰氣である。北面して火山の煙を望み南面して水成岩より成れる連嶺の氷雪に對す。北緯と南緯、其度数は略ぼ同じくして然かも地理的環象の全く反する處に、記述の興味の更に加はるを覺ゆるので

ある。北島の地質構造の複雑なのに對して南島は比較的整然として居る。ニュージールランド・アルプス其西海岸に沿ふて東北より西南に連ること三百哩、本國第一の高山クツク、一名アオランギと稱し海拔一萬二千三百四十九尺に達し、之れに亞ぐにタスマン、ダムビア、シルバアホルン等十二の高峰いづれも一萬尺を超え、萬古不滅の氷雪を戴いて居る。其西麓は大洋より送り來る水蒸氣常に白雲を搖曳せしめ、雨量時としては二百吋に上り、嘗て斧鉞を加へざる密林長く連り、東麓は牧場遠く開けて、數百萬頭の牛、幾千萬頭の羊が少數の人類に飼はれつゝ、其日くの世界を平和に過ごして居る。峰頭の雪は山側の氷河となり、融けて沃野を灌溉するもの、百哩内外に達するワイアウウア、ワイタキ、フルヌイなどの長流あり。絶海の孤島に遊びながら猶大陸なるやの感を抱かしめるのである。

氷河の最大なるはタスマン氷河で、長十八哩幅二哩、一萬四千エーカーの面積を占めて居る。其深さ二十尺乃至一千尺、其傾斜は一哩に平均三百尺の割合にて

流速處によりて異り、遅き處は一日僅に二吋四分を流下するのみ、速き處にても十八吋を超えない。このタスマン氷河は本場のアルプス山中にも其匹儔を見ざるほど規模の大なるものである。之れに亞ぐ氷河はフリーカー、ミューラー、マーチソンなどである。ミューラー氷河はブドロリック氏の計算によれば、一日に三吋乃至十二吋、二十六年間に一哩流下する割合となり、其長さは八哩であるから、其末端より融けて流るゝ水滴は二百年前峰頭に降下した雪片に外ならないのである。此國の氷河は瑞西のそれよりも低き處まで其形を保ち、フランツ・ジョセフ氷河は海上僅に七百尺、フォックス氷河は六百七十尺の地點まで達し、其岸邊まで自轉車を乗りつゞけることが出来る位である。

ニュージールランド・アルプスは南するに従ひて其高さを減するが、西南岸に沿ふてノールウエーに見るが如き深峽ファイヨルドが櫛の齒並に陸地へ穿入して特殊の地形を呈して居る。數ある中に規模は最大とは云へないが、ミルフオードと呼ばれる、峽谷

は出口より奥まで十哩、幅狭きところ四分の一哩に過ぎず、其兩岸は花崗岩若くば水成岩の絶壁嘗て氷河の爲めに削磨されて鏡の如く直立すること五千尺内外、水深は更に一千尺に達し、仰げば蒼空帯の如く山嶺頭上に壓し來り、俯せば深淵底なく水神われを奈落に引入るゝかと計り、崇高森嚴の氣人に迫り、眞に天工の偉觀を極めたりと謂つべきである。之れを彩るに棕櫚の一種なるチトイ 羊齒類のマ、ク、葉の長く尖つたキークー樹など亞熱帶植物をも密生して翠微滴るが如く、點するにラタの花血よりも紅に、リボンウードの花雪よりも白きを以てするを見れば、何人も其咫尺の間に氷河の搔痕の生々しき巖壁あるを忘れ果てるであらう。

ミルフオード峡谷の奥、アーサー峡谷の上流にスザールランド瀧あり、中間二つの巖角に激突して上中下三條に分れ、上部は八百十五尺中部は七百五十一尺下部は三百三十八尺合せて千九百〇四尺の斷崖に懸り、其高さに於ては世界第一と稱

せらる。千八百八十年十月十日ドナルド・スザールランドと云へる老測量家によつて發見せられたので此の名を得た。人形が泣く様なウエカ鳥、キークー聲のキークー鳥、太鼓をたゞいて居る様なカ、ポ鳥などが鳴き止むと、スザールランド瀧の音が絶えず遠雷の様に聞えて來る靜寂な一軒家で、其發見者は永遠の眠に就いた。

峡谷を海に出たところはアニタ灣であるが、峰頂錐の如きマイター山のつゞきに綠石の一種が露出し、マオリは之れをタンギワイと呼んで居る。數世紀前ポリネシアから來航した水夫長タマキテランギの妻が一味の者共と謀りて彼れを振り捨てたので、其行衛を探しにクツク海峽から西岸に沿ふて南航し、ピオピオタヒ（ミルフオード峡谷のこと）に達した時、漸く彼等を見出したが、已に綠石に化して居たので、冷い妻の上に泣き伏した其涙が石に滲み込んだと云ふ。タンギワイは涙水の義で、其石の一片を取りて日光に透すと水滴の様な斑點が見えるのは涙の結晶だと云ひ傳へられて居る。綠石の産地は此外に北方ウエストランドにもあ

るが、其處ではボウナム(翡翠玉)と呼ばれ、タマの一行及び其獨木舟が化石したものと信せられ、グレイマウス港に近き産地では、獨木舟の塗が化して緑石になつたと云ふ傳説がある。白皚々たる氷河の下流、未だ斧鉞の及ばざる太古の密林をくぐりて蒼茫たる大瀛に加はらんとする處、磨いて玉と光るべき緑石の露頭を發見した時の感情は、二百五十年前にウエストランドの豊富なる砂金層を發見した白人の狂喜と孰れぞ。

七、環境の影響

ニュージールランドの砂金が採取せらるゝ様になつたのは千八百五十一年からのことで、今では産額から云へばオタゴ地方を最高とし、ウエストランド、ネルソン地方之れに亞ぎ、又ウワイヒ金山には有望なる鑛脈多く、總産金額は發見當時より今日迄已に九億圓以上の巨額に達した。石炭もウエストランド地方より優良

なものを産すること年々壹千萬圓を超えて居る。此外に當國特有の鑛産物にカウリ・ゴムがある。之れは太古のカウリ樹の脂が土中に化石したもので、ワニス及びリノリアム製造原料に供せられ、今日迄に已に貳億圓以上のものを産出した。

林産額は鑛産物と伯仲の間にありて年々參千萬圓内外に上るが、何と云つても國産の太宗は牧畜に在り、羊二千四百萬頭、製酪用牛百三十萬頭及び其他の家畜二百五十萬頭を有し、年々八千萬圓の羊毛、七千參百萬圓の凍肉及び罐詰、四千萬圓のバター、チーズ、貳千萬圓の革を産し、水産、農産は自給自足、麻は海外に出で、年々輸出入總額五億圓に達し、一人宛四百圓を超過し、人口に比して貿易額の多きこと實に世界第一に位す。牧畜農業山林水産鑛物其他將來開發すべき範圍極めて廣く、加ふるに氣候溫暖、生活の脅威を受くること少く、恐くは現在人口の十倍以上を包容し得て猶餘裕綽々たるものがあらうと思ふ。

然し是等の富が僅々七八十年間に斯くまで開發されたことは全く英國人の物質

的文化的應用と、異常なる冒險忍耐の努力の賜物で、先住民族マオリの秋毫も與らざるところである。彼等は數百年前ポリネシアから移住して以來何をして居たであらうか。火と水の島國、植物には亞熱帶性を殘し、氷河は海拔僅に數百尺の地點迄も達して居るに拘はらず、氣候の溫暖なることは日本も及ばぬほど恵まれた美しい郷土に移住しながら、民族内の鬭争にこれ日も足らず、些の文化的進歩をも示さなかつたのは果して何の故であらう。環象の影響は彼等と雖も慥に受けて居るに相違ない。彼等の大部分が北島に住んで居たからには、其火性的自然界は彼等に火山國民に通有なる特性を與へずには措かなかつたであらう。彼等移住して以來の歲月は、日本の建國に比すれば決して長いとは云へぬが、他の新興文明國の紀元に比すれば、些の進歩をも不可能とするほど短くもあるまい。彼等が大和民族祖先の發祥地と餘り遠からぬ島國より起りて、南北の差こそあれ、殆んど日本と其緯度を同うし、其他に類似の點の多い、天産物にも富んだ新郷土に來

りながら、其共通の素質は毫も磨かるゝことなく、文化の程度は日本と宵壤の差を生じつゝ、空しく英人の治下に屈服するに至つたのは誠に遺憾の至りである。

彼等は創造的腦力と分析的智能とに缺けて居る。彼等は模倣し得るが創造し得ない。直感はかなり鋭いが、事物を分析し之れを組織立てることが出來ない。故に彼等には未熟ながらも直感的文學はあるが、思索的傾向が少しも見られぬ。模倣することは出來ても、それを消化して自家のものとなす力をも具へて得たかどうかは疑問であるが、彼等には不幸にして模倣しやうにも模倣し得べき文化が第一手近かになかつた。濠洲は支那朝鮮の日本に於けるが如くニュージールランドと相對して居るが、其距離千二百哩以上に達し、航海術の幼稚な時代には彼我の交通亦容易の業でなかつたであらう。加ふるに濠洲が白人に知られたのは此國と殆んど同時代であり文化的施設が行はれ、歐洲人の移住する様になつたのも漸く百五十年前のことで、ニュージールランドへ直接に押掛けて來た英人に先んじて、マ

オリが文化の新空氣に接觸することの出来なかつたのは當然である。ポリネシアから移住してより數百年に亙り、彼等は遂に何等の刺激も模倣すべきものをも得なかつた。彼等がそれを得た時は征服された時であつた。

日本は幸にして其祖先の來住が早かつた。其美なる環境、其島國的恩恵はニュージールランドに類似し、然かも夙に文化の花を開いた支那朝鮮とは一葦帶水の近距離に在り、其文化を模倣し消化して自家のものとなし、雜婚によりて不知々々の間に人種的改造をも良好に導くことを得、建國の大精神終始一貫して益々國威を顯揚し遂に世界大國の班に列するに至つた。然し吾等の祖先が萬一其原住地より南方に移動して、日本を半分にした様なニュージールランドに永住して居たとすればどうであらう。彼等の子孫は其處に現在日本の有つて居る文化の半分でも創造し得たであらうか。若し又マオリの祖先がポリネシアから北航して日本島國に移住して居たものとすれば、彼等の後裔も亦吾等と同様に光輝ある歴史を有ち得

たであらうか。

湖上美人 (マオリ戀物語)

昔ニュージーランド國ロートルア湖畔のオワツタ村にウムカリアと云ふ會長が住んで居た。其地位財産聲望何一つとして他の會長どもを服せしむるに充分でないものはなかつた。その上、ウムカリアには何よりも大切な一人の祕藏娘があつた。名をヒネモアと云つて、マオリ種族中評判の美人で嬌名ニュージーランドに隠れなく、若者達は其名を聞いた丈でも青春の血を湧き立たせたくらゐ萬人の戀を身一つに集めて居た。それにつけても父の心配は一方でなかつた。若しも此大事の／＼娘に世間に有勝の間違ひでも出来やうものなら、それこそ是迄の養育も水の泡、悔んだとて跡の祭り、何とかして今の内に然るべき處へ縁付かせやうと有り餘る寶石の中から一際目に立つ立派なものを探し出さうとする様に、婿の選

定に一方ならぬ苦心の末、嫌がるものを無理に押し付けるのも可愛想と、至極開けた父の考から、候補者に數へらるゝ若者達を招待して、其席上で娘に見合をさせることに決めた。

それはある夏の夕であつた。彼の湖畔の邸宅は來客に充分の満足を與へる爲めに遺憾なく飾られた。招待を受けた人達は定刻前から犇々として掛けた。會する者數百名に上り、各部落の粹を集めたことゝて、今日を晴れと着飾つた服装には男性美がとり／＼に發揮されて居た。吾こそ三國一の花婿なれと口には出さねど、衆賓の胸の中には掩ひ難き誇りが燃え立つて居ながらも、兎もすると若しや其月桂冠を他人の手に占められはせぬかと、猜疑の煙に閉ざされ勝であつた。唯一人より及第の榮譽を荷ふことの出来ない晴れの舞臺に、さうした暗闘が甲から乙、乙から丙へと入り亂れて、纏れに纏れた赤繩の糸口は容易に見出されさうにもなかつた。やがてヒネモアは父の手に引かれながら静々と會場に出て來た。其姿が

衆目に太陽の如く輝いた時には、人々の自信と不安の念は曉の星の如く掻き消されて、女王の前に出た奴隷の様に、唯恍惚として其美しさに見とれるのであつた。

ヒネモアの其日の装ひは雉、孔雀、信天翁、フィア、ツイなどの羽毛を織り込んだ長袍を裾長に着流し、小波立てる黒髪は左右に分けて肩に垂れ、此國に特有にして稀有なるキ、鳥の羽毛を挿し、翡翠玉の胸飾を頸から掛けて居る。人を魅する様々の色彩が柔な曲線に調和よく排列せられ、そよ吹く風にもひらくと折からの夕日に輝いて、あらゆる自然美がそれからそれへと浮び出る様はげに天女の天降りも斯くやと思はるゝ計りであつた。

やがて宴は開かれた、盡くるなきの美酒佳肴に陶然として酔の發するに従ひ、青春の血は益々沸き立つて、戀の焰に其身も心も焼かるゝかと計り、若者達の情熱は殆んど其頂點に達したが、ヒネモアは思ひの外物靜かに振舞て居た。血の様

な温泉のほごりにも清冽玉の如き冷泉が素知らぬ顔に湛えて居るが如く。

酒數行の後、遊戯館でマオリ特有の舞踊が始まつた。ベル／＼踊は男のみで劍と斧とを振り廻はして盛に蠻性を發揮した、ハカ踊は女も加はりて日本の盆踊の様に快活な手振りで節面白く歌ひ興じ、ポイ踊は音頭取りの掛聲につれてラウプの玉を振り、巧に入り亂れて柏子よく肩や胸を叩き合ひ、追羽子の様に踊り廻るのである、若者達は畢生の技を闘はして是れ聴けかしと歌ひ、是れ見よかしと踊り、見物は其妙處に至る毎に席を乗り出し足踏み鳴らして喝采した。

此時までも室の一隅に陣取つた樂隊の中につゝましやかに笛を吹いて居る一人の若者があつた。其名をツタネカイと云つて、今はロートルア湖上にあるモコイア島の酋長となつて居る。母は父のワカウエを棄てゝランチウラなる素性の賤しい者に姦通して家出したので、其子のツタネカイまでも世間から輕蔑せらるゝ様になつた。で斯かる盛宴に臨んでも他の若者達は誰れも彼を相手にする者がなかつ

た。彼れは殆んどヒネモアの一瞥をだも得る資格がないものと断定されて居た。併し彼とても熱烈にヒネモアを戀する一人であつた。特に其一人であると思つて居るものゝ、自分の家庭を顧みると、兎ても及ばぬ戀と斷念めるより外はなかつた。

曲數幾つともなく踊り進んで、愈々最終の舞臺が開かれた。此組には取分け踊の達者なもの計りが選抜されたので、開宴前から當夜の呼物の隨一に算へられて居たが、さていよいよ踊が始まらうとした時、ツタネカイは何と思つたか、つと立つて選手の列に加はつた。自負心に充ち満ちた連中は云ふ迄もなく侮蔑の眼を以て之れを拒んだ。が彼は平然として踊り始めた。座は之れが爲めに稍白らけかゝつたものゝ、やりかけたことを中止する譯にもゆかず、曲は其儘進行した。若者達は何が彼に出来るものかと云つた風に、彼とは五六尺も離れて踊つて居たので、彼は特に衆賓の目に立つことゝなつた。で兎ても人並に踊れまいと思はれた

彼は其忠僕チキを相手に熱心に稽古した甲斐ありて、意外にもその手振りが際立つて鮮かであつた。年は二十五六の男盛り、落着いた動作の裡にも燃ゆるが如き情火が閃めいて居た。見物は思はずも其妙技に恍惚としたが、嫉妬の焰は直ちに觀賞の眼をくらませて、折角の踊も中止を餘儀なくしたほど卑劣な妨害が續けられた。

宴會は兎も角も終りを告げて衆賓は思ひ／＼に散會した。今夕の見合でヒネモアの婿君はもう決定された譯である。誰れが其寵兒であらうかと、必勝を期しながらも、其夜のヒネモアの一舉一動に勝手な想像を逞しくして、悲觀もし樂觀もしつゝ、後髪を引かれながら各々家路へ向つた。

翌朝父はヒネモアを膝近く呼んで彼女の意中の人を尋ねた。ヒネモアはさすがに恥かしくてとみには答へも出来なかつた。父は昨夜來會した若者達の名をあれかこれかと一々呼び擧げたが、悉く的外づれた。もうこの外に候補者はない筈

はて誰であらうかと父は思案に暮れて居た。稍暫くしてヒネモアはまだ云ひ残した名前はないかと父に念を押した上で、自分の戀人はツタネカイ様と、少しも悪るびれずに云ひ放つた。

まさかと思つて居た父は意外にも亦意外な娘の選擇に、暫くは物も得云はれぬ迄にあつけに取られて居たが、人もあらうに斯かる卑しき素情の者を娘の婿にしては家の汚れ末代迄の恥辱と、腹が立つやら悲しいやら、胸も張り裂けるばかり日頃やさしい父もさすがに思ひ迫つて散々に娘を打擲した。ヒネモアは父の咎の下にも、一旦斯人ならばと思ひ込んだツタネカイ様、たとへ如何なる故障が起らうとも必添ふて見せる、添はねばおかぬと堅い決心を示したが、父は家名には換えられぬとあつて、中々聽き入れさうにもなかつた。さうしてあらゆる手段を以てツタネカイとの仲を裂かうと計つた。

ヒネモアはごうにかしてツタネカイに遇つて、目のあたり心の丈を打ち明かさ

うと試みたが、其計畫は總て絶望に終つた。ツタネカイの住所は湖上三哩を隔つるモコイア島である。纖弱きヒネモアは獨木舟を漕ぐ術を知らなかつた。さうして其獨木舟とても悉く湖岸に引き上げられて、女の手では容易に汀まで引下ろせさうにも見えなかつた。文を送ることも傳言することも全く出来ない様に仕向けられた。斯うしてヒネモアの心を醜へさせやうと、手を代へ品を替へて試みられたが、其等の壓迫は徒らに彼女の決心を強固ならしむるに過ぎなかつた。

ヒネモアの顔には著しく寢れが見えて來た。ごうかしてツタネカイに遇ひたいの一念は愈々募るばかりで、室内にのみ垂れ籠めて吾身の不運を歎いて居たが、或夜ふと月の光に誘はれて吾とはなしに濱邊にさまよひ出た。周圍はひつそりとして人影も見えなかつた。彼女は引上げられた獨木舟の舷に腰かけてうつそりと湖の面に見入つて居た。そよ／＼とモコイア島の方から夜風が吹いて來た。漣が水面を細かに刻んで、月影が島から濱へと水晶を敷きつめた様に輝き渡つた。之

れが若し橋であつたなら、直ぐにも戀人の處へ渡つて行かれるのにとヒネモアは思つた。

夜露がしつとりと唯さへしめり勝な彼女の袖に置き餘つた。月はいよ／＼明かに萬籟死せるが如く、唯折々汀を洗ふ小さい男波女波の囁きが純潔な戀を物語つて居る様に聞きなされた。ヒネモアは湖上にくつきりと染め出されたモコイア島の平和な姿を飽かず／＼眺めて居た。其處には戀人が今頃どうして居らつしやるであらう。同じ思ひで此月を見て居らつしやるのではあるまいか。御聲が聽えるやうだ。御姿が見えるやうだ。嗚呼どうすれば此湖を渡つて御傍へ行くことが出来るやうと、ヒネモアは儘ならぬ身を悶えて居たが、もう堪へられないのであらうふらく／＼と幻の様に立ち上つて汀の方へ二足三足歩み寄つた。

「笛が聞える」とヒネモアは思はず叫んだ。さうして耳を澄まして聽き直すと、それは水の囁きであつたらしい。又二足三足島の方へ近づいた、夜風が髯のほつれ毛を頬のあたりに漂はせた。

「また笛の音が聽える」と彼女は獨語して、うつとりと五足六足湖水に踏み入つた。儘に笛の音が聽えるのに相違なかつた。次第に近くのではあるまいかと思はるゝ迄にはつきりして來た。聽き覚えのある笛の音、なつかしの笛の音、まさしく戀人の吹く笛の音と、ヒネモアは嬉しさの餘り吾を忘れて猶六七間遠淺の湖に歩み入つた。

笛の音が益々近づいて來る様に思はれる毎に、彼女は一足づゝ島の方へ引き寄せられた。もう水の面が乳房のあたりに届いて、月影が清淨な彼女の胸の上に千々に碎け始めた。其光が心の奥底まで射し込んで、ツタネカイの眞心も毛孔の一つ／＼からヒネモアの眞心を覗いて居る様に思ふと、直ぐにも自分の胸の中を彼の前に披いて見せたくてたまらなくなつて、いら／＼して來たけれど、彼女はもう一步も進み入ることが出来なかつた。足は猶水底の砂を踏んで居ながらも、心は

先きへ〜と急がれた。笛の音がまた一しきり高く聽えて來た。

その御姿が夢の様に眼先に浮き出たかと思つたとき、ヒネモアの足はふわりと水底を離れた。何をか捕へやうとする彼女の両手が水に輪を書くとき、是まで泳いだことのない體が何の苦もなく浮き上つた。誰れか手を取つて呉れて居る様に無中に水を掻いて居ると、次第に島に近づいて行く様な氣がした。父にまで背いて一筋に思ひ込んだ其人に遇へるのかと思へば、もう〜嬉しくてたまらぬ。月影を碎いて〜島の方を心あてに泳ぎに泳いだ。笛の音が急調に水面を渡つて來た。と何時の間に追ひかけて來たやら、一團の黒雲が彼女の頭の上に擴がつて來た。見る〜内に月は忽ち隠れて闇が湖上を蔽ふた。目標にして居た島影も黒幕に閉されて、指して行くべきあてもない廣々とした湖上にたゞ獨り、空しく水を掻いて居る手足に疲勞を覺え始めると、冷さは犇々と全身にしみ渡つて來た。あはれヒネモアは永久に不逢戀を抱いて絶望の淵に沈むより外はなかつたであらう

か。

雲の絶間からちらと月影がさした、やれ嬉しやと渾身の力をその倦怠した手足に注いだ、それはほんの氣休めに過ぎなかつた。眞の闇は再び彼女の前途を遮つた。何と云ふ雲の悪戯であらう。彼女は細く白く裳をとつた雲の端にじつと見入つて居ると、熱い涙が止度なく冷え切つた頬を流れた。と笛の音が益々冴え渡つて來て、何とはなしに冀望の光が眼の底から輝き、靈火が耳の奥から燃え出づるかと思はれた。さうして全身の血が俄に巡り始めると、氷の様な肌に唯ならぬ温みを覺えて來た。彼女は之れに勇氣を得て笛の音をたよりに猶も泳ぎ續けた。戀は盲目的であるだけ、敏感な耳の神経は音波の方向を知覺するに充分であつた。笛の音はいよ〜近づいて來た。

「ツタネカイ様はきつと私を助けて下さるに違ひない」と、彼女は一生懸命に彼岸に達しやうと努力した。愛の力は如何なる困難にも打勝つべく見えたが、今迄

間斷なく聞えて居た笛の音がどうしたところか稍途絶え勝になつて來た。さうして氣のせいか次第に遠ざかつて行く様に聴きなされた、此處だ命の瀬戸際と思へばヒネモアは如何なる微細なる音響をも聴き洩らすまいと注意しながら泳ぎ續けて居た。と、けたましい羽音を立て、水鳥が一羽頭上近く飛んで行つた。笛の音に捧げた注意から一寸離れたヒネモアの目にそれが映じたとき、彼女はふと其羽翼に乗つて行きたいと思つた。其瞬間に急に氣が滅入つて體が重くなつた様に感じたので、踏み堪へやうとあせつたが、手足の自由がきかなくなつて其儘水底へ沈んで行つた。暗黒な水面にはそよ吹く風も全く止んで、常闇の靜さが湖上に漲り渡つた。

彼女は幾度か生氣を失はうとしたが、今一息と勇を鼓して浮き上らうと最後の努力を試みて居る内に、ふと水を掻く手先が何物にか觸つた。無中にすがり付いて手繰る様にして漸く水面に浮き上つた。それは彼女の父が嘗てモコイア島への

舟路を知らせる爲めに立て、置いた落の一つであつた。前面を見渡すと少し明るくなつたかと思はるゝ空の下に黒い森の様なものが見えた。陸に近づいたのだと思ふと、暫くでも水中に潜り込んで居た間の苦しかったこともけろりと忘れた様になつた。

天は終に彼女に無情ではなかつた。最後の數分間の努力は容易に彼女をして彼岸に達することを得せしめた。闇にもほの白い輕石の砂濱に其身を横へたときにはさすがに氣の弛みか、もう一足も歩み出す事の出來ないほど疲れ果て、居た。身に纏ふて居た長袍も何時の間にやら脱け落ちて、夜風が骨をも刺すかと計り、冷え切つたわが濡肌ぬだに藻の様もにびつたりとついた丈なす黒髪にじつと見入つて居ると、吾ながらあさましい姿にしみじみあゝいそが盡きて、其處らあたりに戀人が見て笑つて居らつしやる様にも思はれて、乙女心のもうじつと恥かしくて、何處かに身を隠したくて、いざりゝ濱邊をあてもなく辿つて行つた。

彼女はやがて小さい池、ほとりに來た。何となく肌に温みを覺えたので若しやと思つて手を入れて見るとそれは温泉であつた。彼女は嬉しさと恥かしさに猶豫もなく飛び込むと、深さは漸く腰のあたり迄しかなく、湖から流れ込む水の爲めによき程に温められて居るので、樂々と首までつかつて、氷の様なあさましい肌を温めて居た(此池は今も猶ヒネモアの湯と呼ばれて名所の一つに數へられて居る)。

と、池の向ふから誰れか、こちらへ來る足音が聞えた。彼君ではあるまいかとも思つたが、うっかり聲など掛けて人違ひであつてはと思ひ返して其邊に浮いて居る水草を頭からかぶつて息を凝らして居た。すると其人は次第に彼女に近づいて來たので、どうするのかと恐々窺つて居ると、此池の直ぐ傍に湛へて居る冷泉に下り立つて、木の實を空洞にした大きな手桶に水を汲み入れやうとするのであつた。ヒネモアはそれを見ると早速の妙計を案出した。さうして

「誰れにやる水か」と男の様なきつい聲で叫んだ。

怪物は驚いた。こんな眞夜中に若い女が獨りこんな處に居て作り聲をしたとは感付きさうな筈もないので「ツタネカイ様が召し上るのです」とおづ／＼答へた怪物は彼れの忠僕チキであつた。

「おれに先きへ飲ませろ」と彼女は再び高壓的に出て其手桶を奪ひ取つたので、チキは吃驚して逃げ出さうとするのを暫しと呼び止めて、何と思つたか其水を一口飲むが早いか、岸の岩角に打ちつけた。手桶は微塵にこはれた。

チキは一目散に逃げ歸つて、震へながら其趣を注進に及んだ。ツタネカイは宵の程から笛を吹き疲れたので咽喉の渴を止める爲め汲ませにやつたのであるが、此不思議な出來事に不審ながらも、一旦云ひ出した事は遂行しなければ置かぬ彼は、陽にチキの臆病を叱つて、再び水を汲み來るべく嚴命した。チキは主命もだし難く恐々池のほとりに來ていざ汲み上げやうとする途端に、ヒネモアは又もや

前の如く振舞つた。チキはいよく魔の神の仕業と一途に思ひ込んで足も空にこけつまろびつ走り歸つた。

其僕が一度ならず二度迄も辱を受けたのに、ツタネカイがどうして黙つて居られやう。おのれチキの敵、目に物見せて呉れんづと、傍にあつた棍棒取るより早く、チキつゞけと計り、韋駄天の如く驅け出した。忠僕はそれを諫める間もあらばこそ、主人の御身大切と、息せき跡を追ふた。

温泉につかつて居たヒネモアは早くも罵りたける戀人の聲を聞きつけて、一刻も早く其手に縋りつきたかつたが、御怒りの和くまでと、じつと岩蔭に身を潜めて居た。ツタネカイは魔の神の在所を此處何處と尋ね歩いたが、容易に見つかりさうにもないので、いらだつ手元もしごろに岸邊の水草を棍棒で的もなく薙ぎ廻つた。やがてその近づくを見るや、ヒネモアは身をかはしながら棍棒の先を握つてぐいと引いた。ツタネカイは思はずよろ／＼と前へのめりかけて危く立ち直

つたとき、彼女は、

「ヒネモアで御座います」と叫んだ。

それは聴覚えのある女の聲であつた。なつかしい女の聲であつた。敵を男性とばかり思つて居たツタネカイは斯んな夜更にヒネモアが来さうな筈がない、きつと温泉の精の悪戯であらう、それにしてもよう似た聲と不審ながらも其手を引いた。引かるゝ儘に女は岩蔭を出て、恥しさも打ち忘れて犇と男の手を握つて、

「私ヒネモアで御座います、あなたの獨りのヒネモアで御座います」と再び叫んだ女の顔を一目見て、それがまがふかたなきヒネモアであることが直ぐ分つたときには、ツタネカイは天へも昇つた様に喜び勇んだ。さうして暫くはまだそれが眞實のヒネモアであるかを疑ぐつて居る様に、彼女の髪を撫で肌をさすつたりして居たが、もう夢ではないときまつて、

「よく来て呉れました」とばかりに男泣に泣いた。其熱い／＼涙を心から味つた

ヒネモアは、もう／＼一生御側を離れまいと誓つた。さうして戀人の著て居る長袍に其身も著せられて、新しい家庭へと冀望に満ちた前途を静々と伴はれて行つた。道々嬉しい話を聴きもし語りもしながら。

故里のあたりであらう、東の空がほの／＼と白んで來た。

アラスカ氷河の美觀

附 視察船の遭難

—

第十二回萬國地質學會議主催學術旅行會のC八組に屬する三十八名の地質學者を載せたプリンセス・マクイナ號は、九月三日早朝アラスカの南岸なるアイシー海峽に假泊の纜を解いて、直ちにムイア氷河の見物に赴く計畫であつたが、都合により豫定を變更し、針路を西に轉じてヤクタト灣へ向つた。船は總噸數一千噸内外の小形であつたが、加奈陀西海岸の航路に充つる爲めに二三年前に純客船として建造せられたので、船室などもまだ餘り汚れず、甲板の上も廣くて乗心地がよかつた。三十八名の地質學者は世界各國から會議に列席した人達で、近くは合衆國、遠くはアフリカ濠洲などから、自費で來會した篤學者もある。船は一行の

爲めに特に學會が借り入れたので、他人を雑せぬ水入らずの家族的旅行であつた。

一行の内に女が三人居た。其一人は獨逸の婦人地質學者で、アラスカの旅行を終へてからエジプトに渡り南米を経て歸國すると云ふ三十四五の老嬢で、丸ぼちやの、日にやけた林檎の様な頬をした愛嬌者であつた。他の二人は亭主携帶者で年も若く標緻も十人並の、學會列席を兼ねての新婚旅行者らしかつたので、いつも一行の羨望の的となつて居た。殊に其内の一人は印度の地質技師の細君で、外國婦人中でも珍らしいお轉婆だと評判された位活潑であつた。この『序幕のノラ』は栗鼠の様に始終甲板上を跳ね廻つて、やゝもすると沈黙になり勝な學者肌の一を行を賑はして居た。まだ九月の上旬であるのに、氣温は華氏五十度内外で。甲板へ出ると外套が欲しい位であつた。船はもうスペインサー岬を西北に廻つて北太平洋の廣場に出た。加奈陀の西境を走れる沿海山脈はアラスカとの國境を劃しつ

ゝスカグウェー港の北の邊より西に折れてアラスカの南海岸に沿ふて雪線低く東西に連り、數條の氷河その山腹より流れ出で帶の如く直ちに海に注いで居る。氷河の主なるものはラベルウズ、グランドプラトー、アルセク、チャムバーレン、ヤクタトなどで、殊にラベルウズ氷河は二條となりて海に注ぎ、其落口の絶壁に豎に刻まれた無數の割れ目が肉眼でも見られる程海岸に接近して居たので、撮影距離としては遠きに過ぐるに拘はらず、一行の大半は右舷の欄干に憑れながら、頻りにカメラをバチ／＼云はせて居た。水彩の寫生に得意な某老博士はまだ輪廓も定めない内に筆を投じて、船足の速きに失するを怨じた。

海岸に接する山脈の後方には、海拔一萬五千尺に達するフェアウエザー山脈が模糊として雲表に聳えて居る。晴天でなければ見られぬと云ふのがどんより曇つた空合の今日の舟路から、朧氣ながらも見上ぐることを得たのは一行の幸福と云はねばならぬ。山骨は恐くは片麻岩であらう。氷河の侵蝕を受けたことは其削

立した山形を見ても明かである。是等の連嶺は、日本の金華山沖から遙々と黒潮が齎らし來つた多量の水蒸氣を遮りて、悉く雪と降らせる、其雪が積りに積つて壓力いやが上にも加はり、終に凍結して千秋の氷源を供給するのである。此黒潮が斯かる冷的結果を來すと同時に、其暖い流は北緯五十度以北の寒帯に屬する加奈陀西岸の諸港を年中不凍の良碇泊地たらしむる暖的原因ともなつて居るのである。それ等は共に母國の沿海を流るゝ黒潮の影響であると云ふことは、私達日本人にとりては特に興味の深い現象であるのみならず、更にその暖い水に融て行く氷河の奇しき運命を觀すると、因となり縁となる天界の妙諦に、今更ながら歎賞の聲を放たずには居られなかつた。そうして山脈の彼方アラスカの内地は、南海岸よりも其氣候は著しく寒冷であるに拘はらず、氷源となるべき降雪は大半是等の山巔に奪はるゝが爲めに、殆んど氷河の現存なく、又其過去を語るべき遺跡もない。アラスカの氷河は全く黒潮と沿海山脈との賜ものである。

夕刻、船はオーション岬を廻つてヤクタト灣に入つた。灣の西側は廣濶な低い臺地をなし、海岸に近い所は密林に蔽はれ、青黛長く明鏡に臨めるが上に、銀一髮怪しくも水平に輝いて、灰色なせる空を劃するものがある。是れを學術界に其名も高きマラスピナ氷河の大高原であつて、其海に注がんとするところ實に一百哩の幅を有し、其齎らし來れる土砂は前面に擴がりつゝ、年々新領土を増殖して行くのである。此氷河は其面積の廣大なる點に於ては世界有數のもので、之れが探見を企つることは一行の熱望するところであつたが、上陸が非常に危険であるのと、日程を變更するのは不可能であると云ふ案内方の説に服従する外はなかつた。で一行は双眼鏡觀察によりて辛うじて其好奇心を満足させた。一行は東岸なるドモンチ灣に入り、ヤクタト村落を離るゝこと二三町の處に假泊した。此地は民家四五十の漁村で罐詰製造所教會等あり。住民の大半はアメリカ・インディアンの一種ツリンキット蠻族で、日本の漁夫も二三十名は居るとのことであつたが、

残念ながら面會の好機を逸した。かゝる僻地には素より定期船の寄港する筈なく従つて通信の便もまだ開けて居ない。天涯の一角に蠻族と雜居してまでも我同胞は發展して居るかと思ふと、嬉しい様な口惜しい様な、ごちらとも付かぬ涙が止め度なく頬を流れた。

翌朝六時ドモンチ灣を解纜し、氷河堆積物より成れる平地に沿ふて、漏斗形をなせるヤクタト灣の奥へと北航した。其幅追々狭まりて管状となれるあたり、數條の氷河が屏立せる山腹の急斜面に氷の瀧の如く懸つて居る。其管に當れる部分は嘗て氷河の爲めに穿たれた峽灣で、其兩岸俄に絶壁となり、水深亦三百尺以上に達して居る。様々な形をした氷塊が淡青い空色を含んで幾つともなく浮流して來る。瑠璃盤上に明玉を盛れる如く、山靈之に宿りて早くも一行を歓迎するかと思はれた。水深は少しも減せず、兩岸は益々峻しく、硬砂岩、礫岩、石灰岩の累層が、硬軟一様に氷河の爲めに削り取られた断面生々しく直立し、或は寧ろ倒れ

落ちんとする姿勢を呈して居るものもある。一行は悉く甲板に出で左顧右盼に遑なく、學術的興味は爽快なる頭腦に印象を與ふること常よりも深く、何時しかヘーンケ島をも過ぎ、ハツバード大氷河の前面に迫らんとするとき、船は俄に凄じい音響と共に、激震を起しつゝ其進行を停止した。プリンセスマクイナ號は遂に淺瀬に乗り上げたのである。

二

大音響と大震動との下に吾可憐なるプリンセス・マクイナ號は不幸にも淺瀬に乗り上げたので、丁度朝食を濟ませた計りの乗客一同は云ひ合せた様に甲板へ飛び出した。一しきりは船員共も右往左往上を下へと各々其任處に奔走した。海圖室に居た赤ら顔の老船長はブツ／＼小言を云ひながら船艙へと下りて行つた。乗客は度を失ふ程には騒がなかつたが、不安の念はあり／＼と其面に讀れた。幸に

して船はさしたる傾斜もせず停止したので、沈没しやうなどは誰も思つて居なかつたらしい。さうして其生命全部を船長に委せ切つた一行は出来るだけ船員の邪魔にならない様にと行動して居た。中にはもう氷河や其他の地形の撮影に餘念のない學者達もあつた。此儘沈没して仕舞つても遺憾はない様な顔をして居るものもあつた。激動につれて起つた不規則な波も何時の間にか全く收まつて、底の方からむら／＼と湧き上つて来る泥水に、白い海鳥の群がいゝ船がかゝつたどばかり、ふはり／＼と餌を漁つて居た。何と云ふ静な海難であらう。私達の運命は二三分の内に決すべき瀬戸際であるのに。

やがて船長が船艙から上つて來た。乗客は一齊に彼れの顔色を注視した。其報告によれば、船は海圖に記入してない氷河の堆積物に乗り上げたので、船體は航海に差支へる程の損害はないが、生憎干潮時であるが爲め、船自身の重量で一層土砂の中にめり込む恐れがあるとのことであつた。引卸しに時間を要するとして

も沈没を免がれることは確であつたから一行は稍安堵の思ひをした。『ノラ』さんなんかはもうそろ／＼はしやぎ出して來た。船はハツバート氷河の前面一哩半計りの處に停まつたので、却て氷河見物に適當な正面棧敷が臨時に割り當てられた様なもので、一行に取つては不幸中の幸であつた。棧敷は間もなく撮影家の競技場となつた。人間の目方で船が傾きはしないかと危ぶまれた。光線が思はしくなかつたけれど、私も五六度シャツターをバチつかせた後、双眼鏡で周圍の地勢を觀望した。

西方遙かにターナー氷河がくの字なりに海に落ち込んで居る。其氷壁は約二哩半もあらう。上流から運ばれて來た土砂が河面に夏の博多帯の様な縞を染めて居る。其右に、下流は九分通り土砂に蔽はれたヘーレンケ氷河と、落口は久しい以前に後方へ退却して河口には唯漂砂の三角堆を残した無名氷河の遺跡とがある。灣内で最も大なるハツバード氷河は其東隣に展開し、海水の落込むところ、氷壁

の高二百尺前面の延長六哩に達し、遙か後方に連嶂をなせるセントエリアス山脈より押し出し來れる二大支流が、河口に近き處で合して一大氷原をなしつゝ海に注ぐのである。氷壁は殆んど垂直をなし縦に走れる割目が無數に並び、大きなのは深い溝をなして淵の様な黒い青づんだ陰影を投げて居る。割目と割目との間の氷柱は多角形をなし、横さまに射して來る朝日に輝いて、形容詞以上の氷の刃が上段に構へて、如何なる猛將勇卒と雖も近寄り難く見えた。が、氷河は決して静止しては居ない。極めて徐々ではあるが水の河と同じ様に、河岸よりも中流、底よりも表面の流れが急である爲めに、後から押される力に抵抗を持続することが出來ず、さしにも堅い氷の刃もボキ／＼折れて崩れ落ちる。と氷の煙がむら／＼と立ち揚がる、次の瞬間には巨砲の響が山も倒るゝかど計り峽灣を壓して來る。壯觀云はん方なく、自然を征服せんとする満船の勇者も思はず聲を揃へて歡呼した。氷壁の崩落に壓されて百尺以上にも達するかと思はるゝ高い波が起るが、浮

遊せる氷塊に遮られて勢力を削がれ、船腹を叩く頃は最早可憐な小波に過ぎなかつた。

ハツバート氷河の右に接して、低い砂原の臺地が直ちに海に臨み、其上に若い雜木がまばらに生えて居た。これはワリエゲータッド氷河の末端が其堆積物に蔽はれたので、海岸より川上二哩程の處には氷の面がきら／＼と玉川の晒布の様に輝いて居た。此氷河は其流下の際岩片を削り取り來ることハツバート氷河よりも多量であるが爲め、河口は伏流をなすに止まり、氷壁の壯觀を呈して居ないのである。船が乗り揚げた洲も、或は此氷河が海圖調製後に埋め立てたのであるかも知れぬ。

船は幾度となく全速力の背進を試みたが、生憎干潮時で龍骨は土中に食ひ入るばかり一向其功を奏しない。その度毎に船は烈しく左右に振動する。今にも顛覆しはしないかと危まれる。女が倒れる。男がよろめく。船の中軸に安全な位置を

占めた連中は、池の小舟を態ど動搖させても居る様に手を打つて嬉しがる。船長も船橋で苦笑して居る。いくら船が尻を振つても、一寸も跡へ進めない。目が廻るほどのプロペラーの努力も濁つた水の泡を湧き立たせるに過ぎなかつた。根氣のいゝ撮影家もさうくは早取の濫發を続けることが出来なかつた。多くの人は吞氣さうに案内記や小説などを讀み始めた。水彩畫家は三枚も四枚も氷河の見取圖を仕上げた。此儘船が獨力で淺瀬を離れることが出来なかつたら、電信の便も開けて居ないこんな水の涯からどうして救助船を求めることが出来やう。この多數の一行がどうして二百哩も離れて居る定期航路の港まで漕ぎつけることが出来やう。よしそれが叶つたにしても、どうして食糧に不足を感せず済まされやう。斯うした様々な不安がそろく私達の心の明間を占領し始めた。

氷壁の崩れる音は時々響いて來た。船は屢々左右に搖れた。何事も船長に委し切つた乗客は少しも愚痴つばい質問を發することなく、各々其處に安んじて居た

が、兎もすると話は途絶え、書物は伏せられ勝であつた。船長は確信あるものゝ如く悠々と船橋に立つて命令を下して居たが、一時間過ぎ二時間過ぎても容易に洲を離れさうに見えなかつた。さうかうする内に晝が來た。今日はとても目的地に向ふ見込がないと斷念する者が多かつた。私はふと氷壁の方を見やつた。すると今迄瑠璃色をして居た海面が遽に白くなり始めたではないか。何事であらうと双眼鏡でよく見ると、それは氷塊であつた。疑ふまでもなく潮が差して來た爲め氷壁より崩れ落ちたのが自ら浮き上つて來たのであつた。見るく内には等の浮氷はだんく海面に擴がり、わが船間近く押し寄せて來た。私は思はず萬歳を叫んだけれど其及よりも鋭い無數の大氷片に包圍せらるゝとき、船はどうして其衝撃の難を避けることが出来やうか。まだ第一の海難からも救はれない内に、第二の危険は憐むべきプリンセス・マクイナ號に迫つて來た。

三

氷壁が又崩れた。とそれに壓されて百尺以上にも達するほどの大波が揺れて来た。併し仕合せなことには無数の浮氷が其進路を遮つて呉れた。浮氷は見る／＼内に海面を蔽ひ、小塊は早くも船腹に觸れてコト／＼と音を立てた。晝食の號鈴が鳴り渡つたので一同食卓に就いた。不相變船は背進運動の爲めに甚しく左右に震動したが、棹は嵌められなかつた。二列に並んだ長方形の卓上には、二杯目三杯目の皿が遅速して、ナイフやフォークの音が談笑の聲と縫れ合つて居た。と、不意に船の底の方からガリ／＼／＼と腸を掻き破られる様な金屬的音響が襲つて来た。私達の體の上半部は船首の方へぐい／＼と押し付けられる様に感じた。

「船が洲を離れた」

と無意識に人々が叫んだ。それは喜悅の聲であつたが、其言葉の終るか終らぬ

かに、不安の念が早くも顔色に浮き上つて見えた。掻き破られた船底の致命傷から海水が潮の如く流れ込んで、船は瞬く間に沈没する光景が幻の如く目先にちらついて来た。胸の動悸は津浪の様に高まつた。

さうした不安にも一向頓着なく、船は人間を馬鹿にした態度で苦もなく浮き上つた。蒸汽船が飛行船になつた様な氣がした。私達は心も空に早々晝飯を濟ませて、齒に物の挟まつたまゝ甲板へ走り出た。船は一向沈みさうにも見えなかつた。

「船體に異状はありません」

と船長がにこ／＼しながら報告した時には、一行の頭の血はもうそろ／＼胃の方へ下りかけて居た。一行は滿腔の感謝を以て船長の萬歳を祝福した。『ノラ』さんはダンスの足取をして甲板を飛廻り始めた。船が若し人間だつたら斯うも云つたであらう。

「皆さんは氷河の見物に來られた方々だから、私は一寸その氷河の眞似をして御覽に入れた丈けのことです。嘘とお思ひなさるなら、水底に潜つて船腹を檢べて御覽なさい。氷河地方の岩盤に認められる様な搔痕を必發見なさるでせう」この寒い残暑に誰れもそんな冒険を敢てするものはなかつた。實際そんな検査をする必要もない位搔傷は輕微であつたらしい。で、船は小休憩の後目的地へ向けて進行を始めた。

これ迄北々東に航行し來つた船はこゝで急に其進路を轉じてラッセル峽灣を南々東に向つた。漏斗の管の様になつたヤクタト灣の奥はこゝで鍵なりに曲つて居るのだ。此峽灣はその昔地殻褶曲の際、一大斷層の爲めに生じた弱點に乗じて浸蝕作用を逞うし凹地に穿たれたところを、更に氷河の鉋で削り取られたのである。峽灣の幅は一哩半乃至二哩で殆んど一直線に延長すること約三十哩に及ぶ。其兩岸は削立し、若くは急傾斜をなし、岩壁には氷河の搔痕明かに刻まれ、雜草

木之れに沿ふて繁茂し、翠綠の濃淡幾條にも段だらに織り出されて居た。

水は紺碧を湛へて深淵の如く、これがあの廣々とした海の一部分とは思へないほど物靜かな凄味を帯びて居た。時々浮流して來る氷塊が水面下に銳角勝に蔓つて居るのが手に取る様に透いて見えた。溪谷の斷面はV字形を呈するのが普通であるが、氷河の谷はU字形に穿たれる。時としては其兩岸が倒れて來はしないかと思はれる程急峻である。遠方から氷河の谷を見ると、外國人は馬蹄形の様だと思つて居るが、もつと涼しさうな形容詞を使へば、大皿に盛つて來たアイスクリームを細長い匙で掬ひ取つた跡の様に列れて居るとも云へやう。さうして穿ち残されたアイスクリームの山は削り立つて今にも崩れ落ちはしないかとひや／＼させる。尤も本物の岩山がアイスクリームの様に容易く溶解しては大騒ぎだが、實際永年の間に削られ／＼、何時の間にか海に吞み込まれて仕舞ふのである。

海難地から二十哩程走つて午後三時過ヒツツン氷河の前面一哩許の處に假泊し

た。一行は直ちに小汽船とボートとに分乗して上陸した。此氷河は氷壁を以て直ちに海に接せず、上流から齋らし來つた砂礫が其落口まで二哩程の積をなして居る兩岸は出入少き急峻な岩壁をなし、其半腹以上までも漂土に蔽はれて居る處などがあつた。圖抜けて大きな岩塊の、此邊の地層には見られないのが意外な處に散在して居た。これは疑ひもなく昔この氷河が今よりも遙に大きく且つ深かつたことを證明するのである。

此氷河の落口は絶壁をなせる部分少く、大半は緩傾斜を以て積の面に接し其底から濁水が湧き出し、絶壁の割目からは瀧の如く迸り出て居た。水面は夏の光線に照らされることゝ溶けることも速く、蝕つた海月の様に光つて居た。私はゴムの上靴を穿いて居たので試に其表面に上つて見た。傾斜しては居るが滑りもせず辛うじて歩行することが出來た。幅一尺に過ぎない細き割目をさへ飛び越えるのに躊躇する程臆病であつた。相當の準備なくして氷河を渡することは非常に危

険である。一度其割目に落ちるが最後、青い氷の舌は忽ち其犠牲を呑み込んで仕舞ふのである。其犠牲は永久にヒツツン氷河の底に隠され、氷地獄の責苦に遇ふであらう。アナ恐ろしやと計り踵をめぐらして歸船の途に就いた。

四

翌五日早朝船はラツセル灣の支灣ヌナタク峽灣へと航行したが、灣内流水多く進むことが出來ないので、不得止投錨、一行はボートに分乗し大小無数の氷塊の間を縫つて行つた。浮氷は流下の際に、融解の結果其重心の位置が變移する爲めか、俄に反轉して他の氷塊とかち合ふ音が低いながら物凄く響いて來りした。漸くにしてヌナタク丘の下に上陸し、登ること一千餘尺、途上氷蝕の痕が著しい。頂上には數列の斷層が東西に山を横ぎり、其落差猶四呎半を計り得。之れは千八百九十九年九月三日午後三時に起つた世界未曾有と稱すべき大地震の際に生

じたものゝ一つである。其震域實に百五十四萬哩に達し、其内激震を感じた地域二十一萬餘方哩に及んだ。幸に激震地方は殆んど無人の境であつたので、人類には何等の損害もなかつたが、斷層、海嘯、崩壊、裂罅、土地の隆起、沈降及び氷河の破壊など、自然界の受けた大天災の痕は今以て容易に復舊しないのである。

當年の活劇を物語れる斷層崖の上に立ちて、南を望めばドレーバーの危峯削立し、カスケードイング氷河其急斜面に懸つて居る。眼を東方に轉すればヌナタク大氷河洋々として廣き谿谷を埋め、其表面は天鈞を以て削れる如く、朝暈反映してさながら太古の光の輝けるが如く、其終端は幅一哩高さ二百尺の氷崖をなして直ちに海に臨み、大觀眼を眩するばかりであつた。

十時歸船直ちに抜錨した。此日天氣晴朗、セント・エリアス山脈一萬八千呎の尖峰を載せ、幾多の支氷河、岫を出でし白雲の其儘凝結せしかと計り、下流合してハツバード及びワリエゲータツド氷河となり、昨日心なき船脚をも止めさせた雪の

肌は一しほ美裝を凝らして一行を見送つた。船はやがてヤクタト灣口を出づる頃右岸にブラツク、ガリアノ、アトレギダ、ルシア氷河及び其西南方にエリアス山脈の南麓に擴れるマラスピナ大氷河の夕日に閃くを顧みつゝ、蒼茫たる北太平洋へ乗り出した。

翌朝船はスペンサー岬を廻りグレシア灣に入つた。浮氷は例によつて夥しい。晝食後ムイア入江に投錨、西岸にはモールス氷河あり。東側にはケースメント氷河、アダムス氷河など瀑布の如く懸る。灣の北端にはムイア氷河あり。其落口は長さ五哩の氷壁をなし、岩角の爲めに三分せられて居る。ムイアは此灣での最大氷河で、フェアウエザー山脈の東方に源を發し、流域八百哩、面積三百五十平方哩に及ぶ。ポートにて其左岸に上陸した。氷堆石より成れる丘の上に、唐檜類の樹幹が直立した儘サ、ラの様に壓切られたのが、幾株となく砂礫の中から頭だけ出して居る。これはムイア氷河が一時退却し、其堆石層上に繁茂した森林が氷河の

再度進出の爲め壓倒された遺跡である。翌七日船はアイシー灣に進み、北折してチャザム海峡の一部なるリン水道に入り、デビッドソン氷河見物にと上陸したが氷堆石層上の森林中路を失ひ、唯其泥水となつて流るゝ溝を草隠れに垣間見たゞけで、目的を達せず歸船した。

これにてアラスカ氷河見物を終り夜八時スカグウェー港に着いた。船中最後の晩餐會開かれ、一行よりの慰勞金及び禮狀を船長へ贈つた後、例の卓上演説が始つた。指名せられて辭するを得ず、私も日本語で謝辭を述べた。明くれば九月八日、一行は、慣れぬ航路に面窶れしたプリンセス・マクイナ號に別れを告げ、ホワイトバス・エンド・ユークン鐵道會社の狹軌列車に乗り移つた。一時全世界に其名を轟かしたクロンダイク砂金産地は一行の來着を待つて居るであらう。斯くて日本ならば殘暑猶難去とき、華氏五十度内外のアラスカ南岸に、五日間、碧瑠璃の龍宮城と白皚々たる銀世界との境を出入して居た一行は、嘗て土一升金一升の

諺を實現させたほどの黄金郷へと向つたのである。

千山風景論

千山——其名を聞いただけでも、千山萬嶽巍峨たる風景を聯想することが出来る。それが直ちに地形を表示するばかりでなく、詩的氣分をも豫覺せしむるのである。遠くより之を望めば山の端は鋸の齒の如く、近く之を見れば無數の立體の奥深く重り合へるを感せしめ、更に進んで其山懐に入れば、奇峰怪嶺應接に遑なき迄に簇立し、其風景の變化無量、見るものをして眞に千山の名に背かざるを會得せしむるのである。

由來花崗岩塊より成れる山の自然美は雄大にして然も奇峭の氣に富めるを常とす。千山が花崗岩より成れることも専門家には之れを遠望した丈で推量し得られる位である、千山の山塊は片麻岩、前寒武利亞紀層及寒武利亞紀層を貫いて噴出

した花崗岩のみで、全く他の岩石を容れない。花崗岩の誇とする雄大奇峭の性格は南滿洲自然界の盟主として遺憾なく發揮されて居る。學問上から云へば其西麓に展開して居る片麻岩は千山花崗岩の變相であるかも知れぬ。岩體を構成する主要鑛物は同一であるにしても、變相した以上は別種の岩石と見なければならぬ。其片狀を呈する石理は自然界の風化削剝の作用に抵抗する力花崗岩に比して遙に弱く容易に老衰せる地形に磨り減らされて、花崗岩塊の脚下に横はつて居るのである。鞍山、大孤山、關門山の如き地名を以て其山容を想像せしむるに足れる前寒武利亞紀大鐵鑛床は片麻岩地帯の平調を破り、遼河沖積原頭に其稜々たる山骨を曝露して居るのであるが、千山の大地より之れを見れば、渤海大地溝に面する前衛たるの觀あるに過ぎぬ。

千山的風景を彫刻し得たのは風化削剝の作用に因つたことは勿論であるが、花崗岩の特性として縦横に走れる節理の著しく發達して居ることも亦其重要なる素

因である。之れに加ふるに岩質堅硬、爲めに其節理は往々直立千仞の絶壁をなし或は危峰將に折れんとするが如く、怪巖俄に風雲を呼ぶかと疑はれ、或は其水平に走れる節理の爲めには、所謂千疊敷となり一枚岩となり、其裂罅の小なるものに至りては、屢々老松の根深く盤居する處となり、以て千山の大景に無限の畫趣を點綴し、尙之れを彩るに、紅葉の秋色梨花の春情を以てするのである。

畫題が適切でないが爲めに、折角の傑作も知己を得ずして世評より葬り去らるゝ場合がある如く、風景も亦其地名によりて引立てられることが多い、千山の自然美が朝鮮金剛山に名實共に及ばざることの遠きは止むを得ないとして、安奉沿線の鳳凰山、丁岐山の如き花崗岩より成れる風景と比較すれば、其奇峭雄大なること敢て千山に譲らぬが如きも、其名の適切にして且つ詩的なることは到底千山に及ばないのである。千山——私は其名を聞いた丈でも、足已に花崗岩境を踏むの快感を覺ゆるのである。

されど千山の風景は完璧ではない。之に添ふるに更に潤澤なる水景美を以てすることを得ば、千山の自然美は一層其光彩を加へたことであらう。山不得水不動と頼山陽も云つて居るが如く、水は山景美に缺くべからざるものである、懸りて瀧となり、流れて溪となり、一は直線的に一は曲線的に、脈々たる生氣を山骨に與ふるのである。花崗岩より流れ出づる靈泉は清冽常に玉の如く、塵も留めぬ水晶の解けてや流るゝと思はるばかりである。然かも千山には是等の多くを望む事は出来ぬ。其變幻極りなき千山萬嶽を繞れる雰圍氣も水蒸氣を伴ふこと少なく、霞たなびく春、朝霧立ちのぼる秋の暮の風情に乏しきは遺憾である。山紫水明は自然美の形容詞となつて居るが、花崗岩の主成礦物の色彩は山の紫に見ゆる素因の一と目せられ、殊に千山花崗岩中の長石は肉紅色を帯べるが故に、一段と紫たちて見ゆべき筈であるに拘はらず、這般の美觀を發揮し得ないのは全く水蒸氣に乏しいからである。千山の自然美に水を補ふことを得ば、名實共に如何ばかり生動す

ることが出来たであらう。

水量の乏しきは千山美の缺點であるにしても、其山形は浸蝕消磨の妙を極め、仙骨稜々として山又山と重り合へる太古の面影にも、清新の氣常に横溢し、遙に塵圈を遠ざかつて山懷に抱かるゝの思がするのである。花崗岩は其質堅剛にして優美、譬へば美目秀麗にして然かも大丈夫の意氣天地に磅礴するの概あるもの、其山懷に分け入りて有りの儘の自然美に接するとき、崇巖なる靈氣に感應して、邪念雲と消え、迷想霧と散するに至るも決して偶然ではないのである、登山——殊に花崗岩靈に觸るゝことは塵世行路の清涼劑である。

斯くの如き千山の自然美も滿洲民族には殆んど顧みらるゝことなく、却つて馬賊の巢窟と化し、靈地を汚さるゝ傾あるは甚しく千山の自然美を害するものである。滿洲の民族は斯かる崇高なる自然美を享け入るべき素質に乏しいであらうか。彼等は殆んど登山の趣味をすら解し得ないのに、どうして自然美の感化を受

けることが出来やう。彼等は唯物質慾を充せば足るのである。之れが爲めには千山も單に崛強なる山寨とのみ彼等に映するであらう。蓋し人間は到底自然界を離れて生活することは出来ぬ。その自然界が如何なる形式であるにせよ、人間の心身に影響を與へずして止むべき筈はない。單調乾燥なる滿蒙の曠野の外に、千山の自然界が隱約の間に滿洲民族に感應する處があつたとすれば、それは山紫水明の溫みに缺けた鋸齒の如く冷なる岩骨が彼等の胸奥より情性を削り去り、却つて之れに残忍性を加へたことに過ぎないであらう。

滿蒙の文化は畢竟水分乏しき自然界に哺育され來つた乾燥文化である。斯かる文化を完全に成長せしむるには、千山に其不足せる水景美を加ふる必要あるが如く、猶之れに十分なる濕ひと溫みとを與へねばならぬ。乾燥せる滿蒙文化のカンパスに詩的彩筆を下して之れを溫潤玉の如き名畫に描き上ぐるは、水蒸氣多き郷土に生長し來つた日本民族の天職であらねばならぬ。滿蒙の文化を發達せしむる

ことは果して千山に水景美を加へ得ざるが如く不可能な事柄であらうか。

大連星ヶ浦命名の由來と滿洲地名考

星ヶ浦は滿洲大連の南海岸の地名で、明治四十二年滿鐵が沙河々口の右岸に開いた遊園に新に付けた名である。北は俗に大連富士と稱せらるゝ臺子山一帯の丘陵で朔風を防ぎ、南は煙波蒼茫遠く祖國と相對して居る。海岸は絶壁直ちに潮に洗はれ、或は沙汀出入して男波女波を送迎し、直線と曲線の美參差として相交り之れに加ふるに人工を以てし、和洋折衷の庭作り、古雅な海岸ホテルの建物、居心地よき貸別荘など、さすが滿鐵ならではと思はるゝ設備が遺憾なく施されてある。

星ヶ浦と名付けられたのは略ぼ其遊園としての形を具へた時である。地は素より支那領土内のことでもあり、斯んな日本風の地名が前からありやう筈がない。

大連附近に居住する日本人の慰安場として開かれたからには、同胞が御互に呼び易い名でありたい、何かよい地名はあるまいかと、滿鐵重役から私への御相談に一つ考へて見ませうとお受けしたのが星ヶ浦命名の大序、それから色々首をひねつて見たが、どうもこれと云ふよい名稱が胸に浮ばない。其處で滿洲の地圖を擴げて地名の穿鑿に取掛つた。實さへ舉れば名はどうでもよい様なものゝ、名の爲めに實の顯はるゝ場合も多いので、新遊園地の命名にも私は少からず苦心をしたことである。

地名は如何なる場合でも人間がつけたものであるからには、何等かの意義が必ず伴ふべきものである。殊に支那は文字の國だけあつて、自ら其土地の特徴が形容せらるゝことが多く、旅行家や探險家にとりては屢々思ひも寄らぬ手蔓となることがある。奉天、撫順、興京、通化、懷仁、昌圖、安東の如き地名は政治上の意味から命名せられたことは明白で、其多くは都會を成して居る。小都會の地名

には海城、熊岳城、柞木城に於ける城の字が用ひられ、小部落になると、三十里堡、王家堡子などの堡、九寨、火連寨などの寨の字を用ひた小堡壘の跡、二十里臺の臺の字によりて烽燧臺の所在を示したものなどがある。もつと小部落になると、丁家屯、蘇家屯などの屯、魏家店、張家店などの店の字を用ひたものがあり三家子とか孤家子とか云ふ地名に至つては聞いたゞけでも其寒村なることが點頭かれるであらう。

摩天嶺、白頭山などは名からして如何にも高い山と云ふ感じを與へる。平頂山は其頂が平く、千山や頂岐山の如きは其群峰簇立の有様が直ちに地名の上に浮んで来る。日本橋の上から見れば大連富士と歌はるゝ山の形も、電車沙河口を過ぎて星ヶ浦に向へば、一變して臺子山の名の空しからざるを覺らしめる。山の頂が平でも歪んで居ると歪頭山と名づけられ、尖つて居ると果してその名が尖頭山であつたりする。孤立した山の名には大孤山、小孤山などあり、帽子を伏せた様だ

など思へば、あれが帽子山と教へられる。

傾斜の極めて緩漫な山には太平嶺、長嶺子などの地名がある。之れに反して急峻な山には煙臺炭坑區内の摩臍山など、云ふのがある。富士山の頂上に近い胸突八町とは僅に五六寸の差である。鴨綠江の上流地方に擦屁過嶺と云ふ峠があるがこの屁と云ふ字は尻の義ださうで、餘り形容し過ぎた嫌がある。寧ろ屁の字は肉體的よりも、讀んで字の如く瓦斯體的に用ひた方が一層適切な地名となるであらう。日本にも甲州に尻見峠と云ふのがあるが、これは上り坂の難所を云ひ現はしたもので、前者の如き下り坂を形容したものと對照して、其處に日支兩國國民性の相違を窺ひ得るが如く思はるのである。

山地に入ると何々砒子と云ふ地名が多い。之れは其字が現はせる如く、山の一面が絶壁又は急傾斜を以て平地に臨んで居る處に用ひられ、其岩石の色が白ければ白石砒子、黄なれば黄石砒子と名づけられ、其地が如何なる岩種より成れるか

を豫想し得らるゝ場合が多い。煙臺に近い半砒山と云ふ山は、其名の如く山の半面だけが絶壁をなして居る。山の上に城跡があつてそれが瘤の様に見える處に大疙疽(瘤の義)の部落あり。玄武岩流に蔽はれて山形が城の如く見ゆる處に大豆の産地として有名な北山城子がある。

谷間にある村落の地名に溝又は峪の字を慣用せられ、山の脈が分岐して居る地形を現はすには岔の字を用ひる。岔溝門子二道岔子三岔子などが其例である。山が分岐すれば川筋も自然に岐れるところから、岔路河なる地名もある。三叉路、三股流などの地名もある。支流が幾つも並行して居る場合には、頭道溝、二道溝、三道溝や、四道河子、五道河子など云ふ地名が並ぶことが多い。靠山屯など、云ふ地名も巧に其村の地形を現はした一例である。凹んだ様な地形には黄土坎とか龍補坎とか云ふ村名がある。坎は凹める地形に用ひられる文字である。山の鼻が平地へ突き出して居る處には大鷲嘴子、松樹嘴などの地名がある。

河には沙河と云ふ名が多い。これは滿洲の氣候が乾燥勝で、風が運んで來る土砂の爲めに川筋は埋められ、量の乏しい河水は僅に伏流として存し、河床には殆んど流水を認めない場合が多いからである。石河と云ふ名も同様の意味に用ひられて居る。之れに反して渾河とか遼河とか云へば、如何にも其源遠く、水も豊富であることが想像されるであらう。沼澤地には蛤蟆塘の塘や、蓮花泡の泡の字が用ひられる。是等の地名のある處は、今は乾燥して畑地になつて居ても一度は湿地であつたことを想像し得られるのである。

馬鹿溝と云へば日本では阿呆が住んで居る處の様に思はれるが、滿洲では馬鹿と云ふ野獸が多く住んで居た谷と云ふことが此地名で判断される。植物では榆樹林子、杉松崗、櫻桃園、葦菜峪、榛子嶺などの地名は各々其土地に繁茂した樹木によりて名づけられたので、今は開拓されて沃野になつて居ても、其昔密林を以て蔽はれて居たことが想像される。

鑛産物を應用したのには銅鑛嶺、鐵石山、生鐵嶺、金廠屯などが其例である。鐵嶺なども其附近に鐵山か製鐵所が有りさうに見えるが、これには又念入りの由來がある。其昔高麗時代に此地方より銅を採掘して居たことがあつて銅山縣と名づけられ、渤海大氏の世になりて銀山が発見せられ、遼の太祖其地名を銀州と改めたが、鐵驪國を併治する様になつてから、其鐵の字を取つて鐵嶺と命名したのである。採掘金屬の異なるに従ひ其地名の改稱されたのは興味ある史實と謂ふべく今も猶此地方に銀銅山のあることは其變遷を證據立て、居るのである。……

海岸の地名を新しく付けやうとして居るのに、筆は何時の間にやら鑛山までも上りつめて居たことを茲に御詫して、さてどう命名してよいものかまだ一向見當がつかぬ。以上述べ來つた様な命名法に依るとしては餘りに特徴に乏しい感がある。其附近には小平島、河口、沙河、老虎灘など云ふ巧妙な又は適切な地名が海岸に連つて居るので、一層其困難を感じたが、それも長くはなかつた。遊園地の

西端にある一小村落の名が黒石礁と云ふことを私は直ぐ知つた。村外れの小さい岬の端から暗礁が細長く海中へと突き出て居るのが黒く見えるので、斯くは名づけられたのであらう、面白い名だと思ふと、いつそのこと此名を襲用しやうかと考へた。併し黒石礁では日本人としては如何にも呼びにくく聞きづらい。それに満鐵が新しく開いた處でもあり、どうしても日本的に呼び易い名をと思ひ返しはしたものの、黒石礁と云ふ地名が中々頭を去らない。其中に私はふとこの村名の傳說的由来を聞いた。それは昔の昔天から星が降つて來たが其星が暗礁として今も猶牡蠣などの住所となつて居るのだと云ふ。これは又耳寄りな科學的傳説であるが、其岩質が隕石ならぬ寒武利亞紀石灰岩であることが知れて、矢張架空の傳説なるに聊か失望はしたものの、星ヶ浦と云ふ地名は何の苦もなく直ちに私の胸に浮んで來た。全く天から授つた名であると私は深く感謝したのである。

滿鐵でも異議はなかつた。沙河は天の川と改名した。園内には雲井と云ふ井戸

が掘られた。小さき祠が建てば織姫稻荷と祠られた。Star Beach とバタ臭い名も門札に書かれた。星の家には七夕ならぬ夜毎の逢瀬も重ねられた。星と董の語らひも男波女波の囁きと和洋樂の諧調を失はなかつた。斯くして電車は通じ、自動車道路は開かれ、東洋有數の海岸遊園地となり星ヶ浦なる地名は遠く海外にも知れ渡るに至つたのは獨り命名者の喜びとする計りではない。これ全く天惠の然らしむるところで、その年は私の星廻りもよかつたのであらう。

撫順炭田で捕れた數十萬年前の龜と其奇縁

撫順炭礦古城子から、龜の化石が出たと云ふ話を聞いたので、早速現場へ行つて見ると、露天掘事務所の鶴田歡二君が、之れですと云つて見せて呉れた。成る程龜の化石らしい甲だけがよく保存されて居る。脊に當る處が突起して山形をなし其高さ一寸七分、長さ三寸八分、幅二寸六分で、現生の龜と餘り變りがない。甲以外の部分は全く痕を留めず、油質頁岩が之れに置換へられて居る。産出箇所は露天掘の中段邊で、炭層より十餘尺上部の油質頁岩層から出たのである。兎に角稀代の珍品であるから特に露天掘主任の小沼得四郎君に乞ひ、この化石を拜借し上京の序に、東大教授横山理學博士に見て戴いたところ、陸棲龜類の化石に相違なしとの鑑定であつた（龜と同時に出土した小化石は鱔の齒であらうと云はれた）。該

化石は其後二個発見され、合せて三個になつたのであるが、その破片と覺しきものは猶幾つもあつた。

化石の産出箇所から考へると、その龜の生きて居た時代は、撫順大炭層沈積後間もないことであるから、第三紀時代のものであることは確であらう。して見れば、數十萬年前の珍客が露天掘によりて人類と相遇ふの機會を得た譯で、炭坑にどりても此上なき瑞兆であつた。此化石と現生の龜とを比較して見るに、所謂龜甲形なる六角形を現はさないで、唯平行の線のみ見えて居ることが相違の點で、其甲質及び形態は大差なく、肉體上にも、餘り變つた點はなかつたであらう。

龜と親戚の間柄にある蛇や鱈の類は、其頃から見ると形態に餘程の變化を來たして居るのに、龜類のみは左程變つて居ないと云ふのは面白い現象である。龜の化石の最も古いのは、第三紀よりずっと以前の、中生代三疊紀の地層から掘り出されて居るが、其時代の龜から見ても、現生のものには類似の點が甚だ多いので

ある。昔は龜の様に保護板で身を固めた動物も少くはなかつたが、其等は進化の過程に於て、いづれも必要がなくなつたと見えて、絶滅して仕舞つたのに、獨龜のみは、今も猶戦時平時を通じて、装甲を解かないのである。

子供がよく歌ふ龜と兎の唱歌にもある通り、龜は極めて持久的の動物であるが性質が遅鈍な上に、攻撃力が甚だ微弱で、逃げることも頗る不得手であるから、どうしても装甲で身を固めて居なければ一日も枕を高ふして眠ることが出来ない。一度首と手足を城内に引込まして仕舞へば、敵は攻撃の爲様がない。猫が爪を磨いて城門から攻撃することもあるが、容易に本丸までは届かぬ。鷲の一種で龜を食ふことに妙を得て居るのがあるが、其方法は、龜を攫んで空中へ舞ひ上りよき程の高さから之れを岩角目がけて投げ落すのである。さしもの金城鐵壁も、忽ち粉碎して仕舞ふと、鋭い目を細くした鷲は、徐ろに下り立つて、舌鼓を打つのだと云ふことだが、それ等は極めて稀な例で、龜の防禦力は概して中々嚴重な

ものである。何しろ皮膚と骨格の一部とが一所になつて甲に仕立てられたのであるから、性質は遅鈍であつても、生存競争場裡の劣敗者とならずに濟んだのであらう。

斯かる堅固な装甲を身につけて居ることは龜としての生活には、最も適應した形態で、それが爲めに、三疊紀の昔から今に至るまで大した變化をしなくても、種の生存を續けることが出来たのである。大昔の龜の化石が今日の龜と大差ないことは、其形態が永年に涉り、時と環象との變化に抵抗し且つ適應し得た結果である。さうして、斯かる形態を維持したのも畢竟其習性が遅鈍である一面に、他の動物の眞似が出来ないほど卓越した持久性に富んで居たが爲である。

龜の性質が、極めて持久的であることは前に述べた通りであるが、其肉體も頗る頑強で容易に死なない。脊骨を剥ぎ取つても、一晝夜位は生きて居られる。臟腑を滅茶々にしても、中々絶命せぬ。饑餓に堪へる力も非常なもので、危険と

見れば幾日でも兵糧皆無の城内に立籠り、敵が辛抱負けして引揚げるのを待つて悠々と首や手足を伸ばして欠伸をするのである。昔印度では、世界は大象の脊に乗り、其脚は大きな龜の上に立つて居ると信せられて居たが、龜が如何に頑強持久的であるかは此迷信からも想像し得られるのである。

鶴は千年龜は萬年と世間で普通に云ふことだが、實際そんなに長く生きないにしても、五百歳位の長壽は保てやうと云ふことである。マダガスカー附近の島に産する陸龜の肉は美味しいので盛に歐洲へ輸出されたことがあつたが、長い航海に堪へると云ふ點でも調法がられたものである。鼈料理は日本人にとりては御馳走の一つであり、滋養食料としても珍重されて居る。龜類を犠牲として結核の血清も製造されることであるから、龜類は、其自身が長壽である計りでなく、人類の保健上にも貢獻少からぬのである。三井寺の教侍和尚と云ふ坊さんは、龜ばかり食つて百六十歳まで生きたと、古今要覽に載つて居るが、眞偽の程は請合

へないとしても、其肉が滋養になることは疑なきことであらう。

支那では龜のことを忘八と云つて卑んで居るが、昔は随分尊重したものである。堯の時代に、越裳國から千載の龜を獻したことがあるが、其龜の脊に科斗の文あり、開闢以來の事を記す、因つて龜曆と號けたと云ふことである。龜の甲は歴代易占に用ひられ、之を龜卜と稱へた。撫順から出た龜の化石なども、其甲を吟味したら、地質學者の推理的説明を待たなくても天地開闢以來の變遷が解けるかも知れぬ。日本では一層龜を尊重し、之を目出度きものゝ象徴としたのは申す迄もないことで、倭名鈔に、神龜の字讀んでカメと云ふ、さらばカメとは、カミと云ふ語の轉じたるなりとある様に、龜は神とも崇められた位である。

文獻上、龜が始めて日本に知られたのは神代のことである。彦火々出見尊がわだつみの宮より歸り給ひしとき、豊國姫自ら大龜に乗つて海を照らし來り給ふ、と日本書紀に出で居る。其後雄略帝の時、丹後に浦島と云ふ漁夫が龜を釣つたが

之れを食はずに其儘放つてやつたので長生することが出来たとも云ひ、又其浦島が靈龜を釣つてから頻りに船中に眠つて居る間に、その龜が仙女と化し龍宮へ浦島を誘ひ行つたとも云ひ、いづれも童話的傳説に過ぎないが、浦島のことは、是等の記事から色々な物語や、唄物に作られて、今も猶人口、膾炙して居るのである。

撫順で始めて龜を得た鶴田歡二君は浦島同様龍宮見物に出掛けたであらうか。鶴田君と云へば、撫順炭礦には、同姓の人がもう一人居た。鶴田龜二君其人で、嘗て千金築坑主任のとき、同坑所屬の露天掘に従事して居たことがあつた。兩鶴田君とも露天掘とは深い因縁が結ばれて居たと云つてもよい。この二人の姓名を合せて見ると、鶴が二つ龜が一つで對にならない恨みがあつたが、その露天掘から大昔の龜が出たので、正に二組の鶴龜が撫順炭礦に備はつたことになり、誠にお目出度い次第であつた。歡二と云ふ名の通り、兩鶴田君はさぞ莞爾として欣ん

だことであらう。併しその目出たづくめも永くは續かなかつた。歡二君は不慮のことでもなく永き眠に就き、龜二君も已に炭坑を退き、數十萬年前の龜も其後釣られたと云ふ話を聞かない。それでも撫順炭坑の事業は益々發展する計りである。

其頃の露天掘主任小沼得四郎君は、餘り大男の方ではなかつたが、其膽は斗の如く、撫順炭層の大露天掘法を立案し、空前の大土木工事を開始した。將來其作業の下に炭層が掘盡さるゝ場合には、深さ千五百尺からの大穴が開き、その掘跡には自然に水が溜つて、小沼にあらぬ大沼が現出することであらう。深さ千五百尺以上の撫順沼、それは地質學者をして、數十萬年前の大きな湖水の面影を偲ばしめるであらう。水草や流木が、幾百尺の厚さをなして水底に沈積した頃鰐や龜などの爬虫類が湖畔に出没して居た有様が眼前に髣髴して來るであらう。幾百年かの後、小沼君が掘り始めた此大沼に歴史は同じことを繰り返して、植物は沈

積し、龜は繁殖し(鱒は棲むまいが)再び數十萬年を経過して、石炭となり、化石となつて掘り出されることがないとも限らぬ。

斯様に考へ來れば、撫順の露天掘から龜の化石が産出したことは、決して無意義なことではなく、炭礦の前途を祝福すべき一大瑞兆と占ひ得られるのである。唯返へすくも残り惜しいのはその龜を釣り當てた鶴田歎二君が己に永眠して此世に居ないことである。併し君がその眠に就いてから、化石の龜が更に仙女と化して、君を極樂の龍宮へ誘つて行つては居ないだらうか。私は、其處から露天掘の發展を祝福して居る君の聲が聞えて來る様な氣がしてならないのである。

鞍山鐵鑛と京の大文字

八月十六日は毎年私の故郷——京都東山の山腹に大文字が點火される日である。その八月十六日、今を距ること二十年前の明治四十二年八月十六日は、鞍山の大鐵鑛床が始めて日本人に知られた當日であることを、私は永久に記念したいのである。

其日の數日前から、私は滿鐵地質研究所員加藤直三君と同道して、蓋平縣下の鉛鑛大石橋附近の粘土産地及び其水源地の調査に従事したが、大石橋經理係主任伊藤原藏君の依頼により、湯崗子溫泉場の飲料水々脈をも取調べることに日程を追加し、十五日の夕には溫泉浴客の一人となつた。其頃の溫泉宿は露國傷病兵の療養所に充てる爲めに古い枕木を積み重ねた急造家屋に過ぎなかつたので、設備

は極めて不完全だったが、それでも靈泉の效能には今も昔も變りなく、數日の汗と垢とを洗ひ落して、清淨な身體となることを得た。

温泉は出ても、飲料水が思はしくなくては、將來の發展を妨げると云ふので、十六日は朝から出掛けて其附近の水脈診断に取掛つた。併し今でも御覽の通りの平地のことであるから、如何なる名醫でも一寸取りつく島がない有様であつた。午前中は不得要領で終り、午後は温泉に最接近した高地に登つて地質構造を考査することにした。それは停車場の北側の小山であるが、温泉場一帯の地形が手に取る様に見える。地圖を按じ岩石を調べなどしても、中々見當が附かない。八月の太陽は強烈な光線を容赦なく投げて來るので、徒らに頭へ血が上りつめる計りであつた。幸にも丘の上に小き祠があるので、何も苦しい時の神頼みと奥殿深く進入した。と書くに、大層な大伽藍でもある様に聞えるが、實は小造りの村祠に過ぎない。それも久しく奉仕を缺いたものと見えて、空家同然に荒廢

し、蜘蛛の巢だらけの壇上には、嘗ては御光をも輝かしたかと思はるゝ神體が御肌無慘にも引裂かれて、土と高粱の莖とのほみ出した儘になつて居た。この堂が娘々廟であることを知り得たので、兎も角も一禮して吾等に幸あらんことを祈つた。

神の恵か、暫しの避暑も效驗著く、御堂を出ると心身共に爽快を覺え、簇々と立てる定めなき雲の峰さへいと神々しく思はれた。と西の方約十町計り隔つた處に、此あたりの波狀高地を抜いて、饅頭形をした小山の立つて居るのが眼に入つた。その低空を劃する滑な曲線は、山の端に沿ふて痂の様な一鏈の露頭で其單調を破られて居た。此邊には珍らしい地形の一異相が私の注意を惹いた。

望遠鏡で見て居る私の傍へ一人の支那人がやつて來た。私は加藤君を介して其山の名を聞くと、彼は無造作に鐵石山と答へた。鐵石山！その聲は私の耳に天來の福音と響いた。私達は何の躊躇もなく其山へと向つた。麓から割合に急勾配の

山腹を一直線に頂上目掛けて登つた。黒い轉石が無數に散ばつて居たが、私達は幕地に目的物へと突進した。

一息に登りついた山頂には、案の如く岩石の露頭が脊椎骨の様に突起しつゝ、頂から麓の方へと、東西に細長く續いて居た。私は直ちに第一鑛を下した。足元に飛んだ石片を拾ひ上げて見ると、それはまがふ方もなき磁鐵鑛であつた。私は思はず鐵鑛だと叫んだ。山の名が私達を欺かなかつたことを確め得たとき、私はもう嬉しくてたまらなかつた。さうして當るを幸と鐵鎚を振り廻つた。露頭の大半が第一撃を加へた部分程に上鑛でないことが分つて多少は失望したが、或物を見つけ出した時の快感は損はれなかつた。

村の老幼は此有様を見て瞬く間に私達の周圍に集まつて來た。物知らしい男は私の掌中の鑛片を指して、刺のさゝつた時に此石でなでると直ぐ取れると教へて呉れた。刺が抜けると云ふのは少し怪しいが、鐵の石であることは彼等も知つて

居たらしい。併し嘗てそれを採掘した様な形跡も口碑も全く残つて居なかつた。

「斯んな黒い石なら向ふの山にも澤山有る」と、今來た計りの男が私の肩越に獨語した、私は弾かれた様に、其聲の方に振り向いた。加藤君は直ぐ其山の所在を聞いた。

褐鐵鑛の様な色した食指の方向に目を遣ると、北方二里許隔てゝ、峨々たる山骨が屏風の様になり並んで居るのが見えた、それは今日始めて見た山ではなかつた。汽車旅行で此邊を通行する毎に、窓外を見れば是非共目に入らねばならぬ山であつた。

「何時も見えて通る山ぢやないか」と私は呟いた。まだ一度も親しく其山に接する機會はなかつたが、ごうも其處に鐵鑛があらうとは信じられない、唯黒い色の石があるのだらうと思つた。私は寧ろ失望した。さうしてまだ行つて見ない癖に、あの山に鐵鑛があつてたまるものかとさへ對手を嘲りたくなつた。併しそれは瞬

間に於ける淺薄な自負心に過ぎなかつた。

「あの山が鐵礦だつたら大物だらう。さうだ、今日は京都で大文字のともる日だ」私の胸にはふと斯んなことが浮んだ。どうかあの山が鐵礦であります様にこそこれは嬉しい時の神頼み。

途中で摘んだ草花を神前に供へ、娘々廟に御禮参りをして、お土産澤山に宿へ歸つたは夏の日も早や夕春頃であつた。其翌日は大連に居なければならなかつたので、眼前にまだ見ぬ戀の山を控へながら、一旦は歸任の途に就いたものゝ、一度覺えた味がどうして忘れられやう。其翌月中旬再機會を得て、茲に始めて所謂黒い石の正體を見届けるの光榮に浴した。

私達は湯崗子の次驛鞍山站——今の千山驛に下車し、今通つて來た線路に沿ふて後戻りした。戀人の後姿が前面と同じくごつくと骨ばつて居るのを見ながら鞍山川の鐵橋を渡つて行くと、鐵道のバラストが悉く黒い石であることに氣付い

た。遲滞なく其一塊を拾つて見ると、果してこれも鐵礦に相違なかつた。

「鐵礦がバラストに使つてある」と、私は同行の小林君を顧みた。

「こりや勿體ないですな」と、小林君も驚異の眼を瞪つた。

併し是等の鐵礦は素人から見たら、たゞの石としか思はれない程の貧礦であつた。専門家が見ても寧ろ含鐵硅岩と云つた方が適當な位のものであつた。そんな貧礦も其時の私達の眼には貴重品と映じた。其バラストの上を踏むのも惜しい様な氣がした。

程なく驛から十町計りの線路切取の處に來た。西鞍山の岩骨の末端を切取つたので、兩側とも低い崖になつて居た。數分時の後には、それが悉く鐵礦の露頭であることが知れた。さうして其半以上はバラストとして見た鐵石に比べ稍優良と認めて、私の期待の裏切られなかつたことを喜んだと同時に私が明治四十年滿鐵に入社した以來二年間幾度となく此處を往復して居たのに、今の今迄氣付かずに

過ごしたことを此上もなく恥かしく思つた。沿線のことであるから、どうせ早晚知れるのが、當り前であるが餘りに知れ方の遅かつたのは全く慚愧の至りに堪えないのであつた。さうして私達が遅蒔ながら、それを始めて見付け得たことを此上もなき幸運と感謝せずには居られなかつた。

露頭を追ふて線路西側の對面山に登つた。親しく對面したのは今日が始めてあるのに、もう舊くから交を結んだ友達の様に思へた。踏んで行く脚下の岩盤は貧富の差こそあれ、全部鐵を含んで居た。西鞍山を一巡した後、鞍山川を渡つて東鞍山に登つた。其頂上は西鞍山よりも高く、鑛質は同様であつた。西から東へ一里餘に連互せる西鞍山は、支那式に形容すれば、全山皆鐵とも云へやう。たごへ貧鑛であるにしても、其規模の雄大なものには驚くの外なかつた。

「矢張大文字だつた」と私は獨語した。

その翌年五月滿鐵見習生の一團が千山登りを企てた時、私も其行に加はつたが

其途中で鞍山の鑛石に類した轉石を拾ひ、其地方にも同様の鐵鑛床があることを豫想し得たので、探鑛を開始したところ、程なく弓張嶺の鐵鑛床は小林加藤兩君によりて發見され、續いて大孤山、關門山の鑛床は其地名と共に兩君の燭眼から脱することが出來ず、櫻桃園、王家堡子兩鑛區も東大砬子、尖石砬子などの地名が手引となり、兩君及び地形測量に従事した廣石佳三君の爲めに、苦もなく觀破せらるゝことゝなつた。

其後大正四年八月、即ち私が鐵石山頂に第一錠を下してから丁度六年目に湯崗子に泊つたが、其夜一支那人が黒い石の鑑定を頼んで來た。見ると之れも鐵鑛だつたので、其翌日案内させて實地見分したのが今の小嶺子鑛區である。

間もなく以上の八鑛區は日支合併振興公司に許可せられ、愈々採掘に着手せらるゝことゝなつた。表土を剝いで探鑛して行く内に、此處にも彼處にもと云ふ程に舊採掘跡が多數發見さるゝに至つた。西鞍山の舊坑などは其最大のもので、坑

内廣く、天井は悉く陥落して居た。採掘が容易で比較的良質の部分を選び食ひに稼いだものと見える。當時岩面に穿つた鑿の痕なども殆んど唯の凹みとしか思はれぬ迄に削磨されて居た。兎に角古い時代の作業であらう。其内大孤山の頂上で鐵鑛が掘り出された。其形は昔朝鮮人の使用したものに似て居た。して見ると、此地方の鐵鑛業は高麗民族が滿洲に入り込んで居た頃とも考へられる。其等の遺品と共に鐵を冶いた鑛滓が散在して居るのを見ると、大孤山の鐵鑛は貧鑛ながらも、當時已に製煉に供せられて居たものであらう。

是等の遺跡は少しも口碑に傳はつて居らぬので、其時代を確めることが出来なかつたが、教育研究所員有高巖君が偶然遼史の中から左の數行の記事を發見された。食貨志の條に、

坑冶則自大祖始、併室韋其他產銅鐵金銀、其人善作銅鐵器、又曷木部者多鐵曷木國語鐵也、部置三冶、曰柳濕河、曰三點古斯、曰手山、神冊初平渤海得

廣州、本渤海鐵利府、改曰鐵利州、地亦多鐵、東平縣本漢襄平縣、故地產鐵草置採煉者三百戶、隨賦供納、以諸坑冶多在國東故、東京置戶部司。

と記されて居る。之れによつて見ると、手山則ち今の首山地方で鐵が製煉せられ、遼陽の前身なる東京に監督署が置かれたものらしい。して見ると此地方の鐵工業は約九百年前の頃から開始せられて居たのである。其後全く廢絶に歸し、以て今日に至つたものであらう。私達が最初の發見者だらうと思つたのはとんだ自惚であつた。

私が始め鞍山を見た時には、前人が斯く迄に先鞭をつけて居やうとは思つて居なかつた。鐵鑛は鐵鑛であつても、大部分は合鐵四十%以下で、硅酸を多量に伴つて居る貧鑛であつて見れば、とても近い將來には製鐵用に供せらるゝことはなからうと思つた。發見後間もなく當時の製鐵所長官中村男爵に其標本を見せたとき、其場に技師を呼んで、製鐵所でも御馳走ばかり食はずに、斯う云ふまづい物

でも我慢しなければならぬと云はれたが、それは座談に過ぎなかつた。二十年後か三十年後か、恐らく私達が最早滿洲に居らない頃になつたら、四十%の貧鐵も實用に供せらるゝ時が来るかも知れぬ位に思つて居た。

然るに時勢は急激に變化した。歐洲大戰勃發の結果、日本は上下を擧つて鐵自給策を絶叫するに至つた。滿鐵總裁には中村製鐵所長官が轉任された。含鐵四十%の鐵礦が早くも製鐵原料として眞面目に調査せらるゝに至つた。遂に年額百萬噸の大計畫が突如として廣漠たる高粱畑の上に出現した。全く夢の様な話だ。私は唯嬉しくてたまらなかつた。

其後鐵區の各所から二次的富鐵帶が當事者の手によりて續々發見された。多量ではないにしても、熔鐵爐の不眠不休の努力により、異常の速力を以て捗つた。大正八年四月二十九日火入式が行はれ、五月一日最初の出銑を見るに至つた。唯残念に思つたのは、大孤山、櫻桃園其他の發見者なる加藤、廣石、小林の三君が

其場に臨まれなかつたことである。小林君は新邱炭坑開發に奔走中であつた。廣石、加藤兩君は其前年相次いで黄泉の客となられたのである。兩君が此席に居られたら、好きな酒をどんなにうまく味はれたことであらう。

世界大戰の終結と財界の不景氣とは鞍山製鐵事業にも大打撃を與へたが、それは將來經過しなければならぬ幾多の難關の一に過ぎないであらう。鞍山に製鐵事業を興させた二大動機も過去となつた今日、遲蒔ながらも解決しなければならぬ問題は選鐵に可能性ありや否やと云ふことであつたが、其れも今では完全に解決を告げた。やがて世界的大製鐵所となるの日も遠いことではあるまい。

赤化と自然及人生

天莫空勾踐時非無范蠡と赤い心を墨で書いた兒島高德の赤誠に比ぶれば、露國過激派の赤化宣傳は黒い心を朱に染めるとも云へよう、其實行方法の暴悖残忍なる、尊き靈長の血汐を以て人間界を赤化せんとするのである。彼等の本來の主義はロマノフ專制政府に反抗し、宇宙の哲理より割り出されたものかも知れぬが、其目的を達する爲めには、手段の如何を問はず、全人類の文化を威嚇し、露本國は勿論、東シベリアを席卷して、今や中華民國をも赤化せんとして居る。日本帝國も對岸の火災として之れを看過することは出来ぬ。

赤化なる語は、過激主義者を Reds と云ひ、過激化運動を Red Movement と呼ぶ處から生れたものであらう。彼等の行動を表はすには絶好の形容詞である。勞農政府の國章は赤地に金色の鎌と黄色の鎚とを、太陽の光線に於て、其把手を相互に斜に組合はせたもので、商業旗陸海軍旗いづれも眞紅に彩つたものであり、其軍隊は憲法によりて、有産階級の反抗力を挫くが爲め勞働者及農民より成り、社會主義的赤衛軍と名づけられた。是等が端なくも名實ともに赤化の由來となり宣傳行爲を形容せらるゝに至つた。

傳説によれば、南洋熱帯の或小島には、毎年閉月羞花の一美人が現はれる、獸行飽くなき土人等は忽之れを拉して深林中に伴ひ行き、其雪の如き肌に擬するに鐵椎を以てし、傷口より溢れ出づる紅血を絞りて、臙脂と云ふ赤い繪具を作ると云ふことであるが、其美人と云ふのは微小なる臙脂虫を指したもので、メキシコ南部の太平洋岸は其特産地である。仙人掌の莖で繁殖させ其雌虫だけを集め、熱湯を注ぐか、又は天日に曝して乾燥せしめたものである。一ポンドの臙脂を製するに十萬匹の虫を要するさうで、同地方から輸出する臙脂は百萬ポンドを超えること

のことゆゑ、年々殺される雌虫は實に一千億匹の多数に上るであらう。人間は赤い色を得んが爲めに斯かる莫大な犠牲を供して居る。過激派の赤化運動には彼の南洋の小説的傳説を實現せしめた様な慘酷な行爲が多かつたであらう。彼等は人間の血を以て赤色染料を製造せんとするのであらうか。

赤化の二字は直ちに血を聯想せしむるほど刺戟性を帯びて居る。革命の標識に赤色を用ひることは佛國大革命以來の常例の如くなつて居る。特に過激なる革命主義者を呼ぶに赤色共和黨の名を以てした。赤色を用ひたのは露國過激派に始まつたことではないが、其赤化運動の野蠻的であつたことは史上他の革命に劣らなかつたであらう。

暴風警報に赤玉を掲げ、特に警戒を要する場合には燈臺の光を紅くし、危險物に赤旗を樹て、汽車や電車の行進を停めるにも赤旗を振り、道普請の通行止に紅燈を點するなど、皆赤色の刺戟性を利用したもので是等の赤色は直に危險の接近

を聯想せしむるものである。従つて赤色は最人の注意を惹き易く、朱墨や赤インキは其目的に用ひられ、清書や作文なども赤い色で消されたり訂されたりする。停車場に出入する荷搬夫は赤帽に限り、赤い蹴出が美人の裾にちらつくのは、遠くからでも男の眼を惹きつける力がある。

鮭や鱒などの赤い魚肉を食ふと、時としては中毒して肌に赤い斑點を生ずることがある。子を孕む赤い信女や罪人が着る赤い衣物は汚れた赤である。赤石を拾ふと親に離れるとか、雪隠が焼けるとか、赤馬の夢を見ると火事に遇ふとか、兎角赤色は悪い事の迷信に擔ぎ出される。眞赤になつて怒るのも、赤恥をかい赤面するのも、朱に交りて赤くなるのも、亭主の好きな赤烏帽子も、皆赤化せる人生の醜的側面を形容したもので、丹毒赤痢猩紅熱など、病氣までが赤化宣傳をする世の中である。

赤貧赤手赤裸々などの赤色には空盡物なきを赤と云ふ意が含まれてある。眞赤

な嘘は嘘の最甚しいものである、赤の他人は一縷の関係もない他人である。毛髪の密生した頭の地は青いが、後にかみが少しまします位になると、赤禿に光る。赤い色は又程度によりて善くも悪くもなる。顔が赤くなつても、笑つた時の気持がよいが、眞赤になつて怒つたのは険しい。酒のことを紅友と云ふのも、ほろ酔機嫌の内は罪がない。同じ涙や怨でも、紅涙紅怨と云へば美しく感ぜられる。耻らふのも紅潮位に止まれば、赤耻とは反對に、却つて其美しさを増すのである。縁結びの赤繩には、誰れも縛られたいが人情であらう。

赤色は又若き血潮を聯想せしめる。人間が母體から生れ出ると、第一に赤ン坊と呼ばれる。赤ン坊は胎内に在るとき比較的多量の鐵分を攝取して居るので、血液の量多く、生れたては赤く見えるのである。母乳のみで育つ間は、乳には鐵分が少いため、皮膚の色は一時悪くなるが、固形物が攝取し得らるゝ様になると、顔色が再生々して來る。紅顔の美少年時代はそれからである。若い女が口紅をき

し頬紅をつけるのも、若い血の色を誇りとするが爲めである。若い女の子の衣裳には何と云つても赤い色彩が最相應はしく、花嫁は必赤いてがらを大一番の丸髷にかける。紅閨は若い男女の特権區域であらう。

赤い色は光明をも意味する。燃ゆる火は赤い、太陽を白紙に畫けば赤い日の丸となる。支那の方位論でも北方の黒に對して南方を赤に當てる。固體を熱して攝氏五百度乃至七百度に至れば赤色光を放つ。太陽の光線をスペクトルで分析すれば、赤線に至るに従ひ熱の作用を増し、赤線を超えると、赤内線即熱線となる。

赤色は光の外に熱を感せしめる。所謂温い色である。此意味に於て赤色は熱誠の象徴となる。誠意熱情は赤い心である。誠なく熱なき腹黒い人の心は冷い。熱し易き愛情の赤かるべきは當然である。赤十字には、博愛主義が充分標榜されて居る。

各國とも國旗には少しでも赤い色を用ひて居る。赤色のないのは瑞典、希臘、

ブラジル、アルヘンチナの四國に過ぎぬ。赤い日の丸の旗は最簡單で最崇高な色彩である。佛國々旗の藍白赤は自由平等博愛の三主義を象徴し、赤色部のみを特に幅廣くし、ポルトガルの國旗にも同じ様に少し廣くしてある。獨逸國旗を染める黒白赤の赤色は、イタリー國旗の綠白赤の赤色と共に、祖先が勇戦して流した愛國の血を意味し、米國々旗は熱烈を表はし、中華民國旗には赤は漢民族の色を示し、最上層にありて他の四色を率ゆるの觀がある。

斯く如く赤心は博愛熱烈の基礎となり、人種や國家組織を異にするに拘はらず、國旗一部を赤く染めるのである。戦争は國際上止むを得ない手段にせよ、萬國赤十字社の組織せらるゝを見ても、赤心は全人類の本色と謂はねばならぬ。赤い血、それは人間の生命を司配する最大切なものである。人間は其三分一を失へば直に死ぬ。赤い心は之れあるが爲めに内に燃え得らるゝのである。

人體に最大切な赤い血の常に赤色を保つことを得るのは全く酸素の賜である。

即血液中の血球素と化合し鮮赤色の酸化血球素となるのである。酸化は獨り血液のみならず、多くの物體を赤くする。物が燃えて赤い火光を發するは酸化の爲めである。鐵が錆びれば赤くなる。岩を割く名刀も酸化作用に放任すれば赤錆となつて切味が無くなる。

空氣中に酸素のある限り、自然界の酸化作用は一秒時も休止することなく、地殼には多少でも含まれざることなき鐵分は酸化鐵となり、赤化作用は岩石界にも間斷なく行はれて居るのである。鑛脈の露頭がこの爲めに赤染して所謂焼け又は鐵帽となり、發見の端緒となることが多いのは自然の恩惠の一つである。土石中の亞酸化鐵は酸化の爲めに水酸化第二鐵となり、脱水作用によりて水を失へば、酸化第二鐵即赤鐵礦となるので、此赤色酸化鐵は自然界到る處に産出し、辨柄（紅穀）又は代赭として赤色顔料に用ひられる。黒いアメリカ印度人は之れを脂油に混せて皮膚に赤い艶をつける。

砂漠地方には、赤い砂原や赤土の曠野が多い。之れは高温と乾燥との爲めに水酸化第二鐵の脱水作用が盛に行はるゝからである。地中海の沿岸ベルデ岬、カナリヤ諸島などには、沙漠地方の赤塵が紅霧又は赤雨を降らせる。東方トルコの砂原では、暴風の後数日間は、紅塵萬丈の爲めに雄大な夕焼を映寫することがある。其他アフリカの沙漠では空中地獄を現出し、時としては宇宙塵が血の雨を降らせることもある。

多湿なる熱帯地方にはラテライトと稱する赤土が廣く岩層を被覆して居るが、之れは烈しい風化作用の爲めに、岩石中の硅酸及アルカリが流れ去り、含水礬土と酸化鐵とが残留したもので、其赤味を帯ぶるは酸化鐵の爲めである。此赤土は多孔質であつて、地味瘠せ雜草矮樹を生ずるのみである、ブラジルでは地表から三百尺も岩石がラテライトに變つて居る處がある。ラテライトの面積は、フォンチロ氏の計算によれば、アフリカ大陸の四九%、亞細亞洲の一六%、南米の四三

%と云ふ廣大な面積を占めて居ることである。過激派の赤化はまだまだ其足元にも寄れぬであらう。

自然界の赤化には熱帶的氣候が必要條件である。その多湿なる場合には、ラテライトの如き赤土となり、乾燥せる沙漠にありては、赤塵となりて地上を蔽ふ。熱帯圏内にあるサモア島では、玄武岩が地表から深い處まで、テラ・ロツサなる美しい眞紅の土壤に赤化されて居るが、寒濕地帯なる南洋のケルグエレン島では同様の岩石が少しも赤化して居ない。赤化の火元なる露國の氣候は寒冷な爲め酸化作用強大ならず、其土壤は大抵黒色を帯びて居る。容易に酸化しない露國の自然界から赤化運動の始まつたのは大なる皮肉である。

多湿の熱帯地方でも、有機物に富んだ土壤は、其炭素分が還元作用を營むが爲めに、容易に赤化しない。風土乾燥し植物質少き場合には、三角洲や沖積扇狀地の土壤は赤化し易い。土壤に有機物が少くても、炭酸石灰が多ければ、一張赤化を

妨げられる。石灰分が鐵の三倍も含まれた粘土は、煉瓦に焼いても、クリーム色になつて赤化しない。アルカリが多い場合も赤化は不可能となる。

赤化は地上のみならず、海底にも及んで居る。ブラジルの近海では青泥の表面が一部赤化されて居る處がある。遠洋沈澱物では、赤色深海粘土として知られた赤い粘土層がある。火山噴出物の分解産物と、陸成粘土の最微分子と、宇宙塵(隕石)とより成り、四千一百米以上の深海底を蔽ふ。それより少し浅い處には赤い放散虫泥土がある。此泥土の赤化區域は全海洋底の三、四%に過ぎぬが。赤色深海粘土は實に其三六、一%、即五一、五〇〇、〇〇〇平方哩の大面積を占めて居る。赤化宣傳者も之れを聞かば更に一驚を喫することであらう。

表土や海底の泥土の赤化計りでなく、岩石固有の色としても、自然界は赤化されて居る。火成岩では花崗岩の赤いのが多い。之れは其主成分の一なる長石に微小な赤鐵鑛が多數に含まれて居るからである。長石は其固有の色が赤くない場合

でも風化の初期には赤味を帯ぶることがある。水成岩にも赤いのが多いが、其色は原岩石から譲り受けて居ることもあり、又噴出岩の爲めに赤化された場合もある。鑛物中には、赤鐵鑛以外に固有の赤色を帯びたものも少くはないが、其等は自然界を赤化し得るほど多量に存在しては居ない。

赤い水成岩は随分古い時代にも出来たことは地史學の教ふる處で、太古より現代に至る迄各地質時代を代表する地層中到處に、赤色層が発見されるのである。其等の成生時代には、現今と同様に盛に赤化されたことが證明される。岩鹽や石膏層などが赤色層に伴つて居る處を見れば、乾燥せる熱帶氣候の下に鹹湖や潟などに沈積したものであらう。赤色層の分布區域が往々廣大な面積と厚さを占めて居ることよりして考ふれば、往時に於ける赤化作用は今日よりも激しかったことであらう。

最も古い赤化は古生代カムブリア紀に始まり、次はデボン紀に行はれ、英國で

は舊赤砂岩層と呼ばれ、其厚さ五千米突に及んで居る。斯かる厚き赤色層を沈積させた當時の赤化作用の猛烈であつたことは、他の地質時代に其匹儔を見ざる處である。その次は二疊紀時代で、歐洲各國に廣く分布し、獨逸では赤底層と云ひ英國では下新赤砂岩層と云ひ、共に厚さ五百米突に達する。山東省及滿洲にも此赤色層がある。降つて中生代三疊紀には、獨逸では班砂岩層と呼んで居るが、赤色層最も多く、英國では上新赤砂岩層と稱へ、米國では厚さ一千米突に達して居る。長門赤間の硯石は其次の珠羅紀に出來た赤色岩である。

中生代白堊紀から新生代第三紀時代に跨つて、支那揚子江流域には赤色層が廣大なる面積に沈積した。リヒトホーフエン氏の所謂四川省の赭色盆地は即是れで湖北湖南其他の諸省にも廣く分布して居る。揚子江岸の赤壁は蘇東坡によりて美化された赭色砂岩の一露頭である。所謂蜀の三峽には、緩斜せる赭色砂岩層のみより成れる斷崖二千尺に及んで居る處がある。四川省の首府成都の東三四百哩の間

は、滿目悉く赭土を以て蔽はれ、山野田園一面に紅殻を流せし如く、赤色の面積實に十萬方哩を超えて居る。是等の赭色岩層は間斷なく揚子江の爲めに洗ひ流され、江水常に赤濁、年々運び下る赤泥の量無慮一億八千萬立方米突に上り、流域は勿論支那海に至るまで悉赤化せんとするのである。赭色岩層中には鹽水を産し石膏を埋藏して居るのを見ると、四川盆地は其當時一鹹湖をなし、乾燥せる熱帯氣候の下に赤化されたことが推測される。

以上は岩石界の赤化作用であるが、動植物によりて自然界が赤化される場合も少くはない。米國テンネッシー州では嘗て血の雨を降したことがあるが、それは赤い微生物が旋風に巻き揚げられたのである。高山や極地方では、赤い下等植物の繁殖の爲めに、白雪が赤化されることがある。カスピ海岸に近き紅色湖の水面は微細なる動植物の爲めに薔薇色を帯びて居る。リビア沙漠中には鹹湖多く、鮮紅色の小動物群生し血を漂して居る。紅海は其局部に赤い硅藻が繁殖するによりて

名づけられ、伊勢灣其他の沿海に屢來襲する赤潮も赤いバクテリアの赤化作用に基く。ペリダイニアレスなる下等植物群も赤潮の現象を呈し、俗に潮の腐れと呼ばれ、附近の魚族を全滅せしむることがある。

斯くの如く自然界の赤化作用は古今を通じて、あらゆる方面に見らるゝのであるが、大抵の場合は荒廢的であつて、優等生物の繁榮を伴つて居ない處を見ると自然界の赤化は生物の進化を阻礙したものと謂はねばならぬ。過激派の赤化運動も亦荒廢的である。其魔手の及ぶところ、人類の幸福は悉く敗類せざるを得ないであらう。自然界の赤化は到底人力の如何とも爲し難き處であるが、過激派の赤化は之れを阻止するに難くはあるまい。赤化作用を妨げるものは有機物の還元作用である。吾等は赤化運動に對する還元劑を多量に準備せねばならぬ。

之れを要するに、赤色には希望と絶望との二つの意義がある。赤ン坊や紅顔の美少年は最希望に充ちて居る時代であるが、迷多き青年期を過ぎ、世の辛酸を嘗

めて、赤禿の爺や梅干婆となるは、猶梅の實の林檎酸によりて紫蘇の葉の青色が赤くなるが如く、やがて死の絶望に到達する。希望に輝ける東天紅は青空となり、夕焼となり、紅さした嫩葉は青葉となり、紅葉となり、赤熱熔融せる花崗岩は凝固して青山となるも、草木を失へば赤化して禿山となる。自然界も人間界も、赤より出で、赤に終ること皆其軌を一にするは、實に靈妙不可思議なる現象と云ふべく、希望と絶望と、同じ赤色にして其意義全く相反することに深く思ひ到らねばならぬ。

過激派の赤化は實に此希望の赤色を無視して、直に絶望的赤色に人間界を塗抹し去らんとするのである。赤化作用が如何に自然界を荒廢せしむるかを、彼等は毫も意に介しないのである。一見すれば彼等の熱烈は火の如く赤い。然も熱火は内に燃ゆれば絶大なる動力となり得るも、一たび外面に流れ出でんか、野も山も焼き盡されて、人間界は満目焦土と赤化せずんば止まぬ。この時に當りて草薙の

寶劍は猶日本國民を守護し給ふ。寶劍其赤心を離れざる間は、渾圓球上を赤化せんとする燎原の猛火も何の恐るゝ處があらう。希望の赤色は日の御旗となりて日本國民の頭上に輝いて居るではないか。

黄白と自然及人生

黄白は貨幣の異名である。黄は金、銀は白金也とあつて白は銀である。金銀は貨幣の本位となり、兩者の間には昔から切つても切れぬ關係が結ばれて居る。黄白の金屬光澤には、人間の眼を眩まし心を惑はす力がある。昔淮南王劉安は中篇八卷を著して神仙黄白の術を述べた。その黄白とは方術を以て長生の祕薬たる黄白金を製するの謂である。黄白は實際人間にとりては命よりも大切に考へらるゝことがある。黄白は屢々人間を短命ならしむる毒薬となる。唯聖人の道ありて能く之れを變じて良薬たらしむ。

自然界にありては、黄金の過半は砂金又は山金として産出するが、獨身のごとは極めて稀で、大抵百分の十内外の銀を伴ひ合金となつて存在する。其關係も貨

幣同様に、金が本位、銀が副本位である。黄白であつて白黄でないことは、自然界も人間界も其軌を一にして居る。

斯く如く固體の黄白は貨幣として金屬の主要なものであるが、液體にあつても黄金液と白石炭とは現代に於ける動力の二大要素である。黄金液は石油、白石炭は水力のことである。石炭の時代は最早過ぎ去らんとして居るが、その石炭とても、低温乾溜で石油の形に變へて使用することが、最進歩した方法となつた。水力の利用も到る處に講せられ、無盡藏の利源は、交通機關の進展と共に益々開發されることであらう。

黄塵と白雪は空間を支配する二大黄白である。黄塵は降るときには、人をして塵の浮世を聯想せしめ、戸締堅き二重窓をも白晝用捨なく闖入し、跡二三日はお掃除に下女を歎息させるのであるが、其塵も積り／＼て土壤となれば、肥沃な畑地として耕される。白雪は降るときは極めて風流なもので、湯豆腐に熱爛と來て

は羽織隠して袖引き止められなくても、エ、儘よとお神輿がすはる。その後朝の雪景色は自然界を美化し盡すのであるが、春宵一刻價千金に對して、不知銀世界の價幾何。それも一時の眺めで、雪搔の人夫は餘計なものが降つたと愚痴り、雪解道となつては、てくり人種の難儀此上もない、それでも雪の多く降らぬ歳は農作に障るとて、雪を豊年の瑞兆と崇め奉る。

黄と白は共に明るいと云點に於て隔りの少い色である。寫眞の乾板に感ずる度には大差はあるが燈下では黄色が褪せて全體が白つぽく見える。凡ての光線を悉く反射する白色は色の素であるから、同じ明るい色でも、黄色より優れて居るとも云へる。併し黄色にも自ら其特徴が具はり、東洋的色彩を發揮して居るのである。黄白は日中明るい處で觀るべき色である。夜光は視覺を惑はせる。罪惡の夜間に行はれることの多い原因の一つかも知れぬ。

黄菊白菊其外の名はなくもがなど、其角の句にもある通り、千紫萬紅の花の色

も黄と白に優るものはない。野には菜の花、山には櫻、春色を支配するものは黄白である。西に白薔薇、東に黄菊、これやがて東西文明と黄白二大人種との象徴に外ならぬ。黄毛の狐は南國に産し、白毛の狐は北地に獲らる。本草に、黄金之精化爲白鼠とあるが、白鼠は福の神の使者で、白鼠が棲む家は必富むと云ひ、忠實な番頭を白鼠と呼ぶも之れが爲めである。鼠算に殖える黄金の山をなす頃は、忠勤の番頭の頭も銀白となる。黄白はお家繁昌の象徴ともある。

黄道吉日に花嫁の冠る綿帽子は純白であり。御披露の席には下戸も大白に黄金水の満を引く。歌曲などの藝なき遊女を白人を呼び、近年まで京都の祇園新地に娼妓の一階級として其名を留めて居たが、それを訓に讀んでしろうとの男が、調子外れの黄色い聲で歌ひ狂ふのも廓のならばしである。

黄白にも時として暗黒面がある、生れながらの白痴も、何時迄も黄吻を脱せぬのも、漫りに白い齒を見せるのも皆人の侮を招く原因となる。白眉の老僧が衆生

に百日の説法屁一つを漫畫に描けば黄玉であるが、法壇の手前、白壁の微瑕ぐらゐでは濟まされまい。白眼の部分の多き人は短氣者だと云ふが、面壁九年の達磨も梁の武帝に肘鐵を喰はしたときは短氣であつたかも知れぬ。は一切空なりで軍隊の素養なきを白徒と云ひ、徒手にて戦ふを白戦と云ふのは、赤裸々の赤と同意味で、しかも源平其色を異にするのも妙である。眞赤の嘘と、白ばつくれるのと、其處にも類似の點が見出される。それと云ふのも大抵は黄白がさせる罪惡である。水面に立つ白波は風が収まれば消えるが、人間の白波は何時か捕へられ、白白しても罪が軽くなるに過ぎぬ。心の海にも白波の影をだに宿さぬものでなければ、眞に青天白日の快感を味ふことは出来ぬ。

白晝やがて黄昏となるは日々避くべからざる不變の現象である。其日々々も黄梁一睡の夢の間に、白駒の隙を過ぐるが如く、去つて復還らぬ。白雲かと疑はれた高嶺の花の梢も、秋來れば一葉々々と黄ばんで行く。黄口の乳兒は白面の書生

となり、黄白の奴隷となり、禮記に謂はゆる人初めて老ゆれば髪白く、ただ老ゆれば髪黄となり、終に黄泉の客となり、白玉樓中の人となる。自然界も人間界も黄白に支配せられて、其境域より脱することが出来ぬ。偉大なる哉黄白の力！

人間の様な石炭、石炭の様な人間

人間の様な石炭！そんな石炭があるものか、「寺子屋」の文句ぢやないが、腕白顔に墨べつたり似ても似つかぬ雪と墨、菅秀才との相違よりも遙に距離が遠い、と誰しも茶化して仕舞ふであらう。そりや形の上においては丸で似ても似つかぬ間柄だが、物は試めし、比較して見ると似て居る點がなかく多い。

先づ年配から比べて見ると、人間に老少の別ある如く、石炭にも青年壯年老年の區別を認めることが出来る。地球史の年代別によれば、一番古く出来た石炭は古生代のものだが、何しろ千萬年も経つた老人、ぢやない老炭。其次ぎが中生代の石炭で、人間ならば壯年に屬すべきもの。最も若いのが新生代産、それでも今から數十萬年前に出来たのだ、といつたらそれ見ろ、てんで比較にならぬぢやな

いかと云はれるだらうが、まあ数字の比較は御免蒙るとして、人間にも石炭にも共に老若の差のあることは間違ひのない處と合點して貰ひたい、まあ物事は靜かに考へて見るべきものだ。

血氣にはやると、其處が青年の短處だとすぐ老人に叱られる。くわツと怒る、熱する、がすぐ冷める。氣焰萬丈は青年の長所だが、其論據は兎角肯綮を失うることが多い。活力に富んでも耐力に乏しい。其れ等が人間青年の通性とすれば、石炭青年も亦同様の長所短所を具へてゐる。若い石炭は概して燃え付きが早くて焰が長い。熱し易くて冷め易い。揮發分が多い割には固定炭素が少いから、其燃焼は一時的で長持ちがしない。急に熱を要する場合には歓迎せられても、徐に多量の熱を得ることは望まれない。稀には青年の身を以て廟堂に立ち得る者あるが如く若い石炭にも大なる熱量を保有するものが無いとはいへぬが、それは例外である。

人間の壯年期に達すれば、自ら思慮分別も生じて来る。活氣は幾分か乏しくなつても、經驗が積んで來れば、それだけ多く物の役にも立つ。石炭とても其通りで、中生代の石炭は一般に新生代のものよりも年配が上だけに、熱量も多ければ火持も長い。併し此時代の石炭には大いに活用せらるゝものが比較的少ない如く人間も壯年時代となれば、そろ／＼係累も出來、其割には地位も収入も進まないために、充分に自家の天分を發揮して、社會的活動の中心となり得る者が案外少い。却て青年時代の方が思ひ切つた仕事の出來得る場合の多いのは、青年石炭の經濟上損と知れつゝ工業燃料として歓迎せらるゝのと同じである。

人間でも石炭でも、何といつても働き盛りは老年期に入つてからだ。所謂年の功で、人間ならば四十歳の初老、石炭でいへばまづ一千萬年か。其位の年配になると、石炭も熱量が加はる。火持も長くなる。高熱を要する場合には、古生代の老石炭でなければ充分其目的を達し兼る。それと同じ様に社會に立つて大事業を

遂行する者は老年期の人間に最も多いのは、古今東西皆其軌を一にしてゐる。氣焰は短く、活氣の潑漑でないことは、人間石炭共に老年期には免るべからざることだが、其代りに經驗で高められた火力も、世故に長じた耐久力も共に強大となる。その老成も極端に達すれば無煙炭となり、火力は大なるものがあつても、用途は局限され、大部分は御隠居様として社會から葬られる。併し其熱量の偉大なるものにおいて、老いて益々壯なる巨頭元老として社會の最高位を占め得るのである。

斯くの如く、石炭にも人間にも、矍鑠として壯者を凌ぐ者があるかと思へば、壯年又は青年の輩にも、年配不相應に老成じみてゐるものも少くない。是等は生來さういふ性格の所有者であることもないではないが、病氣や境遇の爲めに變質する場合も多い。新生代の石炭でも、火山岩などの接觸の爲めに無煙炭に變化することがある。日本の無煙炭は斯うして出來た新生代又は中生代石炭の變質物である。

ある。老少不常な石炭界にも免れられない習ひと見える。

日本の石炭が青年期若しくは壯年期に屬するものゝみで、老年期即ち古生代産物が全く無いといふことは、地質學上からいへば單に事實としての外、別に怪しむべきことではないが、工業燃料といふ立場から見ると誠に物足りない。支那又は遠く英國から老年期の石炭を輸入しなければならぬのは残念なことだ。又これを石炭の様な人間に適用して見ると、日本國民は如何にも熱し易くて冷め易い。景氣に乗るのも早い、しよげるのも早い。どうも持久力に乏しい、カロリーが少い、さうして粘り氣が足りない。日本の石炭が青年壯年のもの計りである如く、國民性も亦老年石炭の長所を缺いて居る事は大國民として誠に物足りないことである。粘り氣、それは人間に必要である如く、石炭にも缺くべからざる一性格である。此性格は青年の石炭にも具はらぬではないが、壯年老年者の方に遙に多い。數量において多い計りでなく、質においても優れたものはどうしても老年炭に求

めなければならぬ。此性格を石炭では粘結性といふ。特殊の燃料たる骸炭の製造には此性質が必要である。日本魂の象徴たる鋼鐵の製造に適當な骸炭を供給し得る石炭が日本にどれ位あろうか。

老成の極に達した石炭は青年炭と同じく粘結性に乏しくなる。人間も年寄れば氣短になり粘り氣を失ふものが多い。老耄れると子供に還る、同時に活氣も減り果て、其極端は全く燃ゆることなき石墨となり終る。それは人間のミイラだ。青年石炭に粘り氣の少いは普通だが、活氣の潑刺たることは決して老年炭の比ではない。火持は短くても其瓦斯分の多いことは青年炭の長所となり得る。併し其天分も使ひ様によりては甚だしき短所ともなる。燃燒不完全なれば、折角の揮發分は徒らに煤煙となつて空中に飛散し、人に煙たがられ、都市の美觀を煤けさせて仕舞ふ。黒煙天に漲るを見て工業振興の象徴と謳歌するは錯誤の甚だしきもので、其能率は極めて低い。熱量の比較的乏しい青年石炭と雖も、これを完全に燃燒

せしむれば、其持味は十分發揮せられて、能率は著しく高くなる。人間青年も其善導宜しきを得ば、短所となり易い特性も長所として利用せられ、能率を高め得る。畢竟其使用法の宜しきを得ると否とによりて、折角の長所も短所となるは石炭も人間も變りがない。

山出しの下女は役に立たない。それも使つて居る内には、生れつき白痴などでない限りは、其持前だけの能率は舉げ得る。可愛い子には旅させろ、艱難辛苦を嘗めて始めて一人前の人間になる。人間に若し教育が施されなかつたら、馬鹿は益々馬鹿となり、賢い者もその玉を磨かれずに終るであらう。それは丁度山から掘り出した石炭を貯炭した儘捨て置く様なものだ。品質が悪くこそなれ良くなる筈がない。石炭の種類によると自然發火して徒らに燃えて仕舞ふものもある。是に於いて石炭にも選礦の必要が生ずる。乾溜法によりてこれを瓦斯、油分、骸炭及其他の成分に分つことも、其天分の能率を完全に發揮せしむるに外ならぬ。石

炭もまた教育を受けねばならぬことは人間と同じである。

不燃性夾雜物を石炭から除き去つて其品質を高めることは石炭の普通教育に屬する。更にこれを塊炭粉炭に分け、其塊炭を又大小幾つかに區別して、それ／＼適當な用途に仕向けるのは、中學又は中學程度の専門教育に比すべく、高温乾溜によりて瓦斯及骸炭に分ち、尙副産物をも析出し、石炭の具へて居る能力を分業的に十分發揮せしめやうとするのは高等専門教育に相當し、更に一步を進めて低温乾溜法により瓦斯、石油分、コークライト等に分類することは最高等即ち大學教育に對比すべきであらう。外形は單に黒い石塊に過ぎざる如き石炭でも、教育次第でこの様にも向上させることが出来る。尤も本來の素質が悪ければ、いくら大學教育を施しても、其効果は認められなからうが、普通以上の能力があれば、左程優秀なものでなくても、可なりの成績を擧げることが出来る。青年石炭の揮發分の多いものなどは所謂勉強盛りで教育を施すに最適して居る。老年の石炭にな

ると教育の効果が餘程少くなる。八十の手習ひといふこともあるが、其れ等は到底上達の見込みなし、無煙炭や又はそれに近い石炭は選礦だけにして其儘に使用方が却つて有利である。乾溜法などは迎も應用できない。

人間は如何なる仕事をするにも熱心でなければ其成功は覺束ない。獻身的になれば性來愚鈍なものも一廉の功績を擧げることが出来る。粉骨碎身以て事に當るは人間成功の秘訣である。石炭に微粉燃焼法あるも亦之が爲めである。微粉狀石炭を噴霧の如くボイラー内に吹き込んで點火すれば、完全に燃焼して十分其能率を發揮することが出来る。唯粉骨碎身だけではまだ足れりとせず、其目的に向つて勇往邁進するの元氣が伴はなければならぬ。高壓を以て微粉炭を吹き込むは此意味に外ならぬ。此精神さへあらば、青年も壯年も老年も、人間も石炭も、皆相應に功成り名遂げ得るのである。

人間に完全なものゝなきが如く、石炭にも理想的なるものは皆無である。如何

なる石炭でも必ず多少の灰を含有して居る。燐、硫黄其他種々の夾雑物は、其有害無害は別として石炭には到底免れ難きことである。如何なる聖人君子と雖も人間としての缺點を有つて居ぬものはあるまい。人は其面の同じからざる如く其性質も千差萬別である、無くて七癖有つて四十八癖と諺にもある通り、人間の性質にも夾雑物の存立は免れないのである。

其他、人間も石炭も老いては共に水分を減することや、皺だらけになることや老年石炭は金屬光澤を發するに對して人間は老ゆれば頭が禿げて金光りになるか又は髪が銀色に輝くことや、赫となれば爆發したり自然發火したりして動もすれば自滅することなども、人間と石炭との類似點である。素より科學的根據のある類似でないことは勿論だが、自然界と人間界とに共通な理外の理といった様なことがありはしないかと思はれるのである。従つて單に興味中心計りでなく、多少研究の必要がありはしないだらうか。

以上は人間の個體と石炭とを比較したのだが、人間の集團としての國と石炭層ともにも類似する點が少くない。斷層や皺曲作用を多く受けた炭層は層位や炭質の變化の甚だしきが如く、屢々外寇や革命を經來つた國は民族の變質組織の複雑は免れない。これに反して變動を受けずして然も時代の古い石炭層は上下盤の關係常に整然として秩序を保ち、その炭化作用にも無理がなく、全層を通じて炭質の變化少きは、これを國でいへば吾日本國の如きは、實に其理想的のものといへよう。併し久しく鎖國的であつた日本が廣く世界と接觸することゝなつた今日、多少の變質は免れないであらう。日本は世界有數の地震國であつても、その地震は炭層に殆ど何等の影響を與へないが如く、日本國民性も亦外來思想に發源した地震位で變化する様なことがあつてはならぬ。

石炭を燃やして得らるゝ光熱はそれを構成せる植物が發育當時太陽から享けた光熱そのものである。今日これがために人間が進歩し得たのは一に太陽の賜であ

る。吾國は日の本、萬世一系の天子を戴くこと猶天にある太陽を拜するが如く、天照大御神以來歴代天皇の御稜威は無量大の光熱となりてわが民草を化育し繁茂せしめられ、宇内には比類なき大潜勢力となりて國民性に貯藏せられた。これ恰も太陽の光熱が内には永く石炭に貯藏せられ、發しては眩きまでに現代の文明を輝かすが如くである。石炭はやがて掘り盡さるゝ時あるべきも、代々の御稜威によりて化育された國民精神は容易に滅びないであらう。この精神が光となり熱となりて帝國に動力の源を供給する間は日本は永久に宇宙に輝き得るに相違ない。

熱源として薪の石炭に及ばざるは、薪の一生の短くして石炭の歴史の長きに基く。歴史の尊重すべきは石炭人間共に變りがない。日本人は何は扱て措いても、先づ日本の國體と、其軌跡ともいふべき日本の歴史とを考へなければならぬ。日本の國體と歴史とを考へずして徒らに文化を論議するものは、薪の得易きをのみ知りて、石炭の貴ぶべき所以を覺らぬと同じである。斯くの如き輩は石炭も薪と

同じく種を蒔けば直にも生え來るものと思ふであらう。濫用はその無自覺から生ずる。斯くて不完全燃焼の煤煙は思想界にも漲りて天日ために暗きの觀がある、恐るべきかな。

女性の山と男性の山

山の神は女房の異名である。日本では昔から自分の妻のことを、他人に向つては、愚妻荆妻山妻などの文字を並べるが、賢母良妻又は新しい女に對しては、餘りに卑下し過ぎた名詞である。山の神と云ふ稱號にも、田舎者の下女を山出しと云ふが如く、嘲罵の意味が含まれて居る。言海には山姫より出でたる語ならんと解釋してあるが、山姫は女神のことであるから、それでは却て尊稱過る様なものの、俗に祭り上げると云ふ格で、尊重の裏に嘲笑が舌を出した言ひ草であるかも知れぬ。奥様の奥の字から云へば、妻君てふ山の神は奥山に鎮座ましますべき筈だか、動かざること山の如しは昔のこと、今では婦人問題や新運動やらで、裾廻しか切れ通しであるから、奥様とか山の神とか云ふ尊稱は、最早時代後れであらう。

人間の山の神は云ふ迄もなく女性であるが、自然界の山の神には、男性もあれば女性もある。伊弉諾伊弉冊の二神が國を産まれた後、更に山神を産み、之を大山津見神と名づけられたが、續いて無数の山神が生れ、山ヤマ祇と呼ばれた。山祇の中には、同名で男神たり女神たるのがあつて、容易に其性を識別することが出来ぬ。其一例を擧ぐれば、大山祇神は日本紀の一冊及び古事記には男神になつて居るが、日本紀本書では正しく女神である。大山祇神に男女兩性の神があつたことは、伊勢内外兩宮の攝社に各男女兩神を祀つてあるのも明である。山の神として諸處に祀られてある木花咲耶比賣命は其御女に當らせられる。

山嶽には、之を主宰し又は分掌する神があると云ふ觀念は、人文が餘程開けてからのことで、其以前には山を人格視して山嶽各自の間に親子兄弟等の關係あり時としては互に女を争ひ、或は戦闘をなすものと思推した。是等の迷信は幾多の

神話的傳説を生んだ。播磨風土記によれば、大和の香山と耳梨の男山とが畝火の女山を戀慕し、三角形的葛藤を惹起したとき、出雲の阿菩神が仲裁の爲め播磨の神阜に來たと云ふことである。紀州の紀の川を隔て、妹山香山と云ふ男女の山があるが、或時境界に就て夫婦喧嘩を始め遂に妹山の勝利に歸し、香山近く掘り開いて、紀の川の流れを通したと云ふ傳説がある。陸中姫神嶽は岩手山と相對した高山であるが、隨戀記程によれば、岩手神嘗聚姫伉儷不諧神姫怨恨臨去山谷震動……貞亨中岩手鳴動噴火衆懼爲神崇云々と、之によつて見れば、山の性的關係は寧ろ女尊男卑の觀がある。況して嫉妬の焰内に燃えて、

お那須さんなせその様にやきやんす

いはうくが胸にあまりて

は、地球の風波は絶間あるまい。

釋名に、山産也産萬物也とあるから、支那では山を女性に見立てたものとも思

はれるが、日本では男女兩様に山を人格化して居る。松屋筆記と云ふ隨筆に、山に雄山雌山あり、富士山は雄山なり、物を産せず、伊豆の天城山は雌山なり、物を産すること多しと説いて居る。併し富士山は、其姿から見ても女性美に富んで居るのみならず、淺間權現として木花開耶比賣の女神が祀られてあるから、雌山に見立てた方が穩當であらう。それを松屋が雄山と云つたとすると富士額の姫神は石女であらせられたかも知れぬ。

著るしい山には大抵神様が祀つてあるが、男神の方が遙に多い。嫁一人に聳入人の譬の様である。左に女神を祀つた主な山を擧げやう。

富士山 木花開耶比賣命

火 山

大山 (相摸) いわなが比賣命

水 成 岩

富士山神の妹神に當る

女體山 (筑波) 伊弉册命

閃 綠 岩

女性の山と男性の山

一七七

赤城山	盤筒女神	火	山
鳥海山	豊宇原毘賣命	火	山
羽黒山	玉依姫命と稻倉魂命	火	山
八ツヶ嶽	石長姫(檜ヶ嶽に)	火	山
白山	伊弉册命—妙理權現	火	山
惠那嶽	男神の外に天照皇大神 伊弉册命、木花開耶姫命	花	崗岩
竈門山 <small>(筑前)</small>	玉依姫命	花	崗岩
高妻山 <small>(筑前)</small>	豊玉姫命	水	成岩
祖母嶽 <small>(豊後)</small>	豊玉姫命	火	山
彦山 <small>(豊後)</small>	男神の外に伊弉册命	火	山
野間嶽 <small>(薩摩)</small>	男神の外に木花開耶姫命	火	山
開聞嶽 <small>(薩摩)</small>	男神の外に伊弉册命、豊玉姫の 命、木花開耶姫命、玉依姫命	火	山

紫尾山(薩摩) 伊弉册命

水成岩

女神を祀つた山に火山が多く、水成岩が少いのは注目に値する。次に女名前の山を列記して見やう。これは思ひの外多い。

男嶽	女嶽	石狩	火	山
女阿寒 <small>(相對する男阿寒より高し)</small>	釧路	火	山	
女 <small>(駒形嶽の火口丘)</small>	羽後	火	山	
母狩山	羽前	花	崗岩	
女神嶽	陸中	花	崗岩	
大我妻嶽	陸前	火	山	
小我妻嶽	同	火	山	
乙妻山	信濃	火	山	
高妻山	信濃	火	山	

女性の山と男性の山

黒姫山

信濃火山

繼母嶽

信濃火山

姨捨山

信濃火山

黒姫山

越後火山

黒姫山

飛驒水成岩

沼川姫の栖み給へる靈峰なりと云ふ

早乙女嶽

飛驒火山

夫婦山

越中結晶片岩

吾妻山

岩代火山

胸の煙立つと云ひ思山と名づく

女良山

下野火山

女體山 (日光白根)

下野火山

専女山

下野火山

女體山 (筑波の一峰)

常陸閃綠岩

女嶽

武藏水成岩

相對する男嶽より高し

乙女峠 (箱根外輪山)

相模火山

神妻山

遠江結晶片岩

虎御前山

近江水成岩

雌龜山

出雲休火山

女三瓶山

石見火山

三瓶山の外輪山にて男三瓶、子三瓶、孫三瓶と併立す。

男三瓶最も高し。

祖母ヶ嶽

豊後火山

女性の山と男性の山

女 岳

肥前

風土記に所謂嬢子山にて景行帝西征の時、土蜘蛛八十女據りて皇師を防
けりと。

高 妻 山

筑後 水成岩

母 ケ 嶽

薩摩 火山岩

雌 龍 良 山

對馬 水成岩

其他女子山(樺太にあり舊稱ベルニセツト)、女前岳(備中)、姫御前山(播磨)、姫ヶ丸山(出雲)、姫ヶ嶽(豊後)、姫御前山(筑後)、女鞍ヶ嶽(肥後)、等がある。

是等の女性名詞の山を通覽すると、女神を祀つた山と同じ様に、水成岩の山が極めて少數で、火山岩が大多數を占めて居る。總じて火山には恐ろしい現象が多く、現在活動して居ない火山でも、其地形岩相共に男性的なのが常であるのに、却つて女名前を附けられたり、女神を祀られたりする事は、畢竟噴火作用の如

き地變を神怒と觀じ、之を和げるが爲めに優しい女性を配しやうとした一種の迷信から起つたことかも知れぬ。それとも女性の山に火山が多いのは、嫉妬深い女心を諷刺したものであらうか。いづれにしても一々其命名の由來を調べることが出来たら、面白い神話的事實が見出さるゝことであらう。其他、祖母とか姨とか云ふのは稀で、大抵は若々しい女名前が附てあることや、男女兩體の對立して居るときは、男の高きもあり女の高きもありて、平均すれば男女同權になることや、黒姫と云ふ名が三つもあるのに、白姫を名のる山が一體も見えないことなども、興味をそゝる話材で、一笑に附し去るべきことではないと思ふ。

地形から云へば、京都東山一帶、奈良三笠山の様な圓みを帯びた輪廓の山は概して女性的である。火山でも白扇を倒にした様に出來た儘のは所謂富士額とも形容せられ、眩き許りの雪の厚化粧に染模様の變化極りなき裾野を長く曳いた立姿は、詩歌にも之を女性化して詠する場合が多い。それが風雨多年の自然力の爲め

に其形を崩されると、變生男子以上に男子的となる。花崗岩や水成岩の山は、之に反して多年の削磨作用を蒙り全く角が取れる迄は容易に男性を失はない。東山や三笠山などは寧ろ氣高い老女に形容した方が適當であらう。又季節から見れば眠る冬の山は老翁の如く、怒る夏の山は壯士の如きに對して、笑ふ春の山、粧ふ秋の山は共に女性的である。

山と人生との間には、物質的ばかりでなく、精神的にも密接なる關係あることは今更云ふ迄もないことであるが、殊に火山には高峻なのが多く、其山形亦萬人の仰視を容易ならしめ、其崇高美は不知々々の間に日本人の腦裡に感應し、其國民性の一面を築き上げたことは争はれぬ事實である。

人間の山の神も家庭の重鎮たること、山の自然界に於けると其趣を一にし、一家の興廢は其内助の如何によること多く、夫の性行も婦によりて善くも悪くもなることあるを思へば、山の神の責任も亦高大なりと謂はねばならぬ。

展 望 車

朝食を済ましてから私は展望車に乗り移つた。十脚計りある椅子に日本人は誰れも見えない、唯観光外人の夫婦者らしいのが話し合つて居るばかりであつた。私は最後尾の椅子に腰掛けた。さうして列車の尻から吐き出されて行く二條のレールを深い興味を以て眺めた。朝日に輝きながら、列車の進行と反對の方向へ刻々に遠ざかつて行く。遠かるに従つて、軌幅は左右から或力に押しつぶされる様に次第に狭まり、終には一筋になつて、森や家や高低の裡に吸ひ込まれて仕舞ふ。ガタン／＼と繼目を渡る車輪の音に時の單位を刻まれつゝ、吐き出される途端に、レールの現在は過去へと移る。其近い過去もやがて遠い過去と隔てられ、現實から夢幻の境へと薄らいで行くのだ。

兩側を彩る菜の花も、青麥も、柳も、櫻も、鶯の聲も、さては小川の囁きも、それからそれへと忙しさうに重り合つて、霞の刷毛先にぼかされる、幾多の名所舊蹟も、何の斷りもなくすん／＼眼界を逸して、故郷の過去へと急ぐ。過去と現在を劃する踏切の白い信號旗の陰に、婚禮の御禮廻りを着飾つた田舎女の、何時も見なれて居る汽車の行衛を、猶物珍らしさうに見送つて居るのが、何かの暗示でもあるかの様に思はれる。と、美しい草花を提げたお婆さんが眸から汽車道へ登つて来る。其花も其白髪頭も、次の瞬間には豆よりも粟粒よりも小さくなつて、果ては穂麥の裏に隠れて仕舞ふ。

曉の夢を載せて喘ぎ／＼越えて來たあの時は、もう薄いコバルト色にぼかされて、平和の光に包まれて居る。其處には嶮しい崖に刻んだ岨道や、地獄の響のする隧道や、岩から岩へと溪流に渡した釣橋などが、偶然の惡戯を藏して注意深き科學をも嘲らうとして居るのに、それも無事に過ぎて仕舞へば、其瞬間に於ける

私達の過去は平和の追憶に過ぎない、これから先も同じ様に平和に未來へ進んで行かれるものゝ様に、旅人は唯其現在に憧がれて居る。

機關手が列車の前程にのみ注意して居る様に、人は過去を忘れ又殆んど現在をも忘れることが出来るであらうか。展望車に乗つて居る様に、過去ばかりを見て生活する事が出来るであらうか。それとも普通客車の窓から見渡す様に、刻々に移り行く現在にのみ執着して生きて行かれるものであらうか。そのどれにも偏する事の出来ないのが人生の常である。其日々の現實に齟齬したり、未來の空想にのみ耽つたりする人達に、どうして眞の人生が味はへやう、其現實も空想も一度は必ず永久不變の過去となるべき運命をもつて居る。さうして私達は其追憶の情緒によりて、人生を過去に味ふことが出来るのである。

あらゆる人生の波瀾も、限りなき自然の變化も、過去として之れを望めば、一様に單純な背景に過ぎない。實物と背景との調和を保つことによりて成功するバ

ノラマの様に、現在より過去への推移を不斷のものと思ふことは出来ない、其處に時を劃する大きな溝が有るのではないか。遠く隔つた空間、久しい昔の時間は、現實とは全く懸け離れて、何等の交渉もない様に思はれる。自然も人生も、宇宙の大舞臺を道具立から書割へと無限に變つて行く。大きな過去の力に引きつけられては、其現在を形造つた立體的時間も空間も平面化され點化される。單純に見ゆる未來から複雑な現在が生れ、やがて復單純の過去に葬られる。さうして私達は其未來と過去とを結び付ける現在の軌跡を、殆んど現在を意識する暇もない程の速さで、過去へと引き寄せられて居るのだ。窓外の遠山が乗客と共に走つて居ながら、何時か列車の後になつて仕舞ふ様に、未來に進んで居ると計り思つて居る人生も、其實は過去へ過去へと急がれて居るのである。

斯んな事を考へながら、私はふと後を振りかへると、何時の間にか、日本人の客が一つ先の椅子にもたれて、さも心地よささうに過去の夢路を辿つて居るので

あつた。私は物數奇にも其夢を判じながら、暫く寢顔を見つめて居た。

飯の食ひ方と國民性

まだ滿鐵本線の列車に、食堂車が連結されていない頃のことであつた。私は上り列車の一等室に乗つて居たが、瓦房店驛を發車すると、通路の向側の座席に居た一人旅の西洋人の前に、列車ボーイは食卓を設けてお誂への西洋辨當三皿と、パンとを其上に並べて行つた。お料理の何であつたかは今記憶して居ないが、件の洋客はボーイを呼び返して、其内の二皿を下げさせ、食べ終つてから一皿づゝ持つて來させて、三皿とも平げた。斯かる場合に、西洋人は皆同じ様な食べ方をするかどうかは明言は出來ないが、幾皿も前に並べて、西洋人が食事をして居るのを、私は未だ嘗て見たことがない。恐くは西洋人の飯の食方は、必ず一皿づゝ運ばせ、それを食ひ終つてから、次の皿に手を付けると云ふ習慣であらうと思ふ。